われわれの教育活動

2010 年度総括と 2011 年度方針

No.32

2011 年 4 月

一橋大学スポーツ科学研究室

われわれの教育活動

2010年度総括と2011年度方針

No.32

目次

はじめに	3
I. 2010 年度の教育活動の成果と課題	4
1. カリキュラム編成と体制	4
2. 教育活動の成果と課題	7
A. 全学共通教育	7
(1) スポーツ方法Ⅰ	7
(2) スポーツ方法Ⅱ	12
(3) スポーツ科学・健康科学	17
(4) 教養ゼミ	19
(5) 教育社会学講義	20
B. 学部教育	21
(1) 学部講義	21
(2) 学部ゼミ	24
C. 大学院教育	26
(1) 大学院講義	26
(2) 大学院ゼミ	28
3. 教育条件の整備・拡充	29
II. 教育部活動	34
1. 実践交流会	34
2. 教育活動日誌	35
3. 調査活動	36
4. 教育部の活動・体制	37
III. 2011 年度教育活動の方針	37
1. 2010年度の達成と課題	37
2. 2011年度の基本方針	43

3. 2011 年度のカリキュラム編成と体制	43
4. 教育条件の整備・拡充	44
5. 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整	45
6. カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究	45
7. 教育部の活動	45

年間計画（案）

資料 1. 2010 年度時間割

2. 「スポーツ方法」「スポーツ方法Ⅱ」に関するアンケート調査用紙
3. 「スポーツ方法」「スポーツ方法Ⅱ」に関するアンケート調査結果
4. 「人間にとって「性」とは？～「ヒューマン・セクソロジー」教え続けて 21 年」

(2010.6.18 毎日新聞夕刊)

はじめに

法人化から7年めとなる今年度は、第二期中期目標・中期計画の最初の1年となった。

第一期に「教育の質の向上」を目指して導入された「学生による授業評価制度」、「GPA制度」、「成績説明制度」などは着実に定着しつつある。しかし、昨年のこの「はじめに」でも述べたとおり、それら新規制度の導入が、その目的である「教育の質の向上」に結びついているかについて、「導入のために走り続けている」——振り返らずに前に向かって常に動き続けている状態——がゆえに実感がもてないというのが正直な見解である。今年度の入学生から適用されることとなった「一定 GPA の卒業要件化」は、そのようなわれわれの走行スピードをこれまで以上に加速させ、さらには走りながらさまざまなアクロバティックな芸当さえも強いるようになってきている。

たとえば、一定 GPA 値の卒業要件化に関連して、教育担当副学長からの要請を受けて成績不良が見込まれる学生の早期把握をするための調査を、夏学期と冬学期に実施した（スポーツ方法Ⅰの受講者が対象）。一定 GPA 値を卒業要件として適用した場合、最初の躓きが4年間で卒業できるかを決定してしまうため、問題を抱えた学生に対する早期対応は非常に大切であると考え。しかしながら、こうした新規制度導入にともなう諸々の対応が、どのようにゴール（教育の質の向上）と結びついているのかが明確にされないまま走り続けることは、「徒労感」や意欲の減退を生むのみである。せめて、われわれが集めたデータがどのように使われ、躓きかけていた学生のケアに対してどのような影響をもったのかというフィードバックなどがあれば、「少しは前進した」との実感のもと走り続けることは可能になる。

さて、法人化以降の一番大きな課題である新体育館構想を含めた「施設条件の整備」について、今年度も執行部に対して、その必要性について説明し、改善を要請してきたが、年度末の3月になって事態が大きく進展した。これまで、われわれは教育担当副学長に対して、キャンパス内のスポーツ・運動施設エリアの整備について検討するワーキンググループの設置を要望してきたが、杉山学長・盛教育担当副学長の体制の中では足踏み状態であった。しかし、山内学長・落合教育担当副学長の体制になって早々、施設マネジメント委員会の下に「課外活動施設等検討ワーキンググループ」が設置されたのである。もちろん、このワーキンググループの設置が直ちに事態の改善に結びつくわけではない。だが、10年以上にわたり進展がみられなかった屋内体育施設の整備に関する検討が開始されるという事実だけでも、われわれにとっては大きな希望となり、「教育の質の向上」に対する取り組みの推進力となるのである。

今年度、われわれは新たなるスタッフとして鈴木直文講師を迎えることができ、ここ数年続いた運動文化科メンバーの入れ替わりによって、平均年齢も大いに若返ることとなった。新しい体制のもと、われわれは先輩たちがこれまで積み上げてきた成果を継承しつつ、さらなる高次を目指して歩みたいと考えている。今後とも学内・学外各方面からのご批判、ご教示をいただければ幸いである。

2011年3月 岡本 純也

I. 2010 年度の教育活動の成果と課題

1. カリキュラム編成と体制

A. 全学共通教育

(1) 科目の編成

現代社会における健康やスポーツ・運動文化の重要性の高まりをふまえ、「入学後の学生の体力・健康の維持促進や技能の向上に留意しながら、健康やスポーツ・運動文化に関する科学的、総合的認識と高度な教養を身につけること」、そして「この文化領域を主体的に享受できるような能力の育成」が全学共通教育科目における運動文化科目の目的であり、そのために以下の 3 つの科目群を置いている。

①スポーツ方法Ⅰ（必修科目・通年 2 単位）は、「基礎的な体力と、スポーツについての基礎的能力（技術認識、練習方法、技術習得、組織運営など）の養成、及びグループ活動を通しての人間関係の形成を目的」としている。

②スポーツ方法Ⅱ（選択科目・半年 1 単位）は、スポーツ方法Ⅰの目的を共有し、より高度なスポーツ学習の機会を提供するとともに、新しい種目の導入などをふくめ、多様なスポーツ実技種目を開講している。

③スポーツ科学・健康科学は、講義科目（選択科目・半年 2 単位）であり、現代社会における健康やスポーツ・運動文化のあり方にかかわる問題を、さまざまな角度から取り上げている。

これらのうち、スポーツ方法Ⅰ・Ⅱは「抽選科目」と呼ばれ、受講生が希望するクラスを申請し、それを電算機によって抽選・決定する、という方法がとられている。

(2) 担当体制

<運動文化科目の開講コマ>

2010 年度における運動文化科目の開講状況は下記の通りであり、総コマ数を通年コマに換算すると計 45 コマ、そのうちスポーツ科学・健康科学は 3 コマ、教養ゼミは 1.5 コマである。

	2010 年度		2009 年度	
全学共通教育開講総コマ数	計 45	(通年)	計 43	(通年)
・スポーツ方法Ⅰ	30	(通年)	29	(通年)
・スポーツ方法Ⅱ	21	(半年)	19	(半年)
・健康・スポーツ科学	6	(半年)	6	(半年)
・教養ゼミ	3	(半年)	3	(半年)

<体制>

①専任は、上野が退職、鈴木が着任し、昨年度に続き 6 人の体制となった。

②専任担当総コマ数は 21 コマ (3.5 コマ×6 人)。

③2005年度の定年前負担軽減、2007～2009年度の一部サバティカル実施+定年前負担軽減は昨年度で終了した。

④非常勤担当コマ総数は、昨年度と増減無しの24コマとなった。運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は53.3%である(2009年度55.8%)。

<2010年度の開講クラス>

	スポーツ方法Ⅰ=通年		スポーツ方法Ⅱ=半年	
	2010年度	2009年度	2010年度	2009年度
テニス	6	6	6	6
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	2	2
サッカー	5	5	2	2
バレーボール	3	3	—	—
ソフトボール	3	2	—	—
ジャズダンス	2	2	—	—
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	—	—
体操	—	—	1	1
ゴルフ	—	—	2	2
古武術(剣道)	—	—	1	1
ジョギング	—	—	1	1
(ジョギング&フィットネス)	—	—	1	1
野球	—	—	1	—
ソフトラクロス	—	—	1	—
療育コース	1	1	—	—
	30	29	21	19

2010年の特徴点は、下記のとおりである。

①スポーツ方法Ⅰでは、ソフトボールを2コマから3コマに増やし、療育コースを復活した。

②スポーツ方法Ⅱでは、新任専任教員の着任により、「野球」を復活し、「ソフトラクロス」を新設した。また、昨年復活した「剣道」を「古武術」に変更し開講した。

③非常勤担当種目は昨年度と変更無し。

④スポーツ科学・健康科学は、昨年度と同様6コマ、教養ゼミは3コマ開講した。

⑤2008～2009年度、月曜日が非常勤講師のみの授業日になっていたが、今年度は、専任が2限・夏に「現代社会とスポーツ」を開講し、非常勤との交流に努めた。

B. 学部教育

2010年度は、下記のように、社会学部で講義3、ゼミ5、商学部で講義1、ゼミ1を開講した(担当科目の全貌については、Ⅲ-1「2010年度の達成と課題」を参照。大学院担当科目に

についても同じ)。

1) 社会学部

	科目	担当者
基礎科目	スポーツ社会学の基礎	坂
発展科目	①身体社会史*	尾崎
	②スポーツ問題の社会学	坂上
	③スポーツと社会過程	—
	④身体と教育	—
ゼミ		尾崎 坂上 坂 中澤 鈴木

—は休講を示す。*大学院科目も兼ねる。

2) 商学部

	科目	担当者
発展科目	スポーツビジネス論	—
寄付講義	ツーリズム産業論	岡本
ゼミ		岡本

C. 大学院教育

2010年度は下記のとおり、両研究科で合わせて講義5、ゼミ6を開講した。

1) 社会学研究科

科目名	担当者
①国際スポーツ論	鈴木
②地域スポーツ論	尾崎
③身体社会史	尾崎
④身体教育論	中澤
ゼミ	尾崎 坂上 坂 鈴木 中澤

2) 商学研究科

科目名	担当者
スポーツマネジメント	岡本
ゼミ	岡本

2. 教育活動の成果と課題

A. 全学共通教育

(1) スポーツ方法 I

〈開講クラスと定員〉

曜日・時限	種目	定員
月・1	サッカー	40
	バドミントン	32
	テニス	42
	ソフトボール	44
月・2	テニス	42
	ジャズダンス	40
	バレーボール	40
	ソフトボール	44
月・3	ジャズダンス	40
	バレーボール	40
火・1	バスケットボール	36
	サッカー	40
	ソフトボール	44
火・2	テニス	42
火・3	サッカー	40
水・1	サッカー	40
水・2	バドミントン	32
	サッカー	40
木・1	テニス	42
	スポーツフィットネス	40
木・2	テニス	42
	バドミントン	32
木・3	バドミントン	32
	療育コース	—
金・1	バドミントン	32

	フライングディスク	44
金・2	バドミントン	32
金・3	バレーボール	40
	テニス	42
	バスケットボール	36
合計		1,132

上の表にまとめたように、2010年度の「スポーツ方法Ⅰ」は、10種目・計30クラス（定員1,132名）を月～金曜の計14コマ（1限12コマ、2限10コマ、3限8コマ）に配置した。

これらの10種目のうち、①屋外種目は、テニス、サッカー、ソフトボール、フライングディスク、バレーボールの5種目・計18クラス、②屋内種目は、バスケットボール、バドミントン、ジャズダンス、療育コースの4種目・計11クラス、③屋内屋外の両方で実施しているのがスポーツフットネスの1種目・1クラスである。屋外種目が全体の6割を占めており、バレーボールさえも屋外で実施しているが、これは小さな体育館（バドミントンコート4面分）がひとつしかないためである。小平キャンパスからの移転・統合は、体育施設に関しては、未だ完成しておらず、早急な解決が必要である。また、課外活動との関係で4限目が使えない、という点も大きな制約となっている。

なお、昨年度と同様、月曜2限については履修人数が少なかった。その原因を探ったところ、1年次必修科目とのバッティングしていることが判明した。対応を検討した結果、さしあたり2011年度からこのコマの開講クラスを4から3に減らし、1クラスは水曜日に移すことにした。

〈受講生の満足度と授業目標の達成度〉

運動文化科では、1997年度より毎年受講生を対象とした「スポーツ方法に関するアンケート」を実施してきている（詳細についてはⅡ-3「調査活動」を参照）。

今年度回収できた調査票は881人分（全登録者の83.0%）であったが、その集計結果は、「大変満足」38.2%、「まあ満足」46.6%であり、両者を合わせると84.8%となる。これは、この12年間で最も高い数値である。ちなみに「ふつう」と答えた者は12.7%で、「やや不満」は1.81%、「大変不満」は0.6%にとどまっており、スポーツ方法Ⅰは、2010年度においても受講生からきわめて高い評価を獲得しているといえる。

受講生は、スポーツ方法Ⅰの授業の何に満足しているのか？「スポーツ方法に関するアンケート」には、「スポーツ方法Ⅰの目的が達成されたかどうか」を問う設問があるが、各項目とも目的達成度合い（「大変そう思う」と「そう思う」の合計）が上がってきており、これが満足度の向上の内実をなしていると考えられる。つまり、「授業で実施したスポーツを楽しめるようになった」86.7%を筆頭に、「親しい仲間ができた」86.5%、「技術や練習方法についての認識が深まった」79.1%、「技術や技能が向上した」70.5%、「健康や体力の維持・向上に役立った」68.9%というものである。

これらのうち、とくに高い数値を示している「スポーツを楽しめるようになった」と「親しい仲間ができた」の2つの項目は、大半の授業で実施されているグループ学習を軸にしたスポーツ方法Ⅰの授業の特徴と成果が如実に現れたものといえよう。また、「技術や練習方法につい

での認識が深まった」と回答している者が約 8 割、「技術や技能が向上した」と「健康や体力の維持・向上に役立った」もそれぞれ約 7 割に達している。このような実態は、スポーツ方法 I の授業の目標達成度の高さを示すものに他ならない。

〈成績評価と A 評価ガイドライン問題〉

2010 年度の「スポーツ方法 I」の成績は、全体で 1,061 人中、A が 413 名 (38.9%)、B が 410 名 (38.6%)、C が 158 名 (14.9%)、D が 31 名 (2.9%)、F が 49 名 (4.6%) であった。

こうした成績のあり方について、第 1 に指摘できるのは、A と B が合わせて 77.5%、約 8 割に達していること、そしてそれが先に見た受講生の満足度（「大変満足」38.2%、「まあ満足」46.6%、計 84.8%）と符号していることである。このことは「スポーツ方法 I」の授業が、担当教員の側からみても、かなり高い成果をあげていることを物語っており、受講生の満足度と担当教員の成績評価の高さは、一体の関係にあるとみていいだろう。

第 2 に指摘すべきは、A 評価の修得者が 38.9%と、「A・B・C 評価取得者数の 3 分の 1 以下」という全学のガイドラインを 5.6%オーバーしている点である。この点をどう考えるか？ 2010 年度には、ガイドラインを厳格に適応するための取り組みもなされた。GPA 導入によって、従来の A 取得者のうち、飛び抜けた者だけを「A（きわめて優秀 Excellent）」、それ以外は「B（優秀 Good）」と評価することになったわけだが、この点をふまえて、「A：90 点以上で、きわめて質の高い個人レポートを提出した者、班活動において類まれなリーダーシップを発揮したり、ユニークなアイデアで授業を牽引してくれた者」、あるいは「A：80 点以上の者のうち、最高得点者から数えて『A・B・C 評価取得者の合計の 3 分の 1 の人数』までの順位に入っている者」と規定し、学生に周知をはかった授業（坂上）もある。

しかし、担当者 13 名全員から回答を得た 2010 年度の「教員アンケート」をみると、「30 回近い授業を無遅刻無欠席でなければ（無論授業運営にきちんと参加した上で）A 評価にならないという状況が冗談でなく確実に近づいている。これは病弱な学生、遠距離通学者、女性等々には大変不利不平等である。90%の出席で十分エクセレントといえるのではないか。A 評価のガイドラインのスポーツ方法への適用の撤廃を強く望む」（鬼丸）、「A を 3 割以内におさえるガイドラインを、スポーツ方法のような性質の授業に当てはめるのは正しくない。絶対評価で対応するのがふさわしいと感じる」（柴崎）、「A 評価のガイドラインについては見直す必要がある」（坂）といった意見が出されている。

この問題を考えるうえでポイントとなるのは、スポーツ方法の授業の大半が、1 クラスをさらに 10 人以下の小さなグループに分け、それを基礎に 1 年間授業を展開していくというグループ学習の形態で進められていることである。上記のような A 評価のガイドラインの見直しを求める意見は、こうした授業実態を背景としたものとして理解する必要があるだろう。A 評価のガイドラインは、現在、ゼミナールや 20 名未満の授業に対して適用を除外しているが、スポーツ方法の授業実態もそれらと同じ少人数教育でなされているのである。この除外規定をスポーツ方法にも準用し、A 評価のガイドラインの適用除外科目とすることが妥当ではあるまいか。GPA 制度をめぐる全体的な議論もふまえながら、この点をさらに検討していく必要がある。

成績に関して、第 3 に指摘すべきは、D 評価 31 名 (2.9%)、F 評価 49 名 (4.6%)、計 80 名 (7.5%) の存在である。D・F 評価となった者の多くは長期欠席者であり、この問題に対す

る取り組みも開始しているが（後述）、より細やかな対応が求められている。

〈熱中症対策から考える——必要とされている教養とは何か〉

2010年度の夏は異常な暑さに見舞われ、スポーツ方法ではとくに7月以降、その対応を余儀なくされた。それは、従来のスポーツ施設のあり方全般に見直しをせまるものであると見てよく、熱中症の危険から授業が実施できないケースも多くあった。その場合、教室で班ミーティングを実施したり、視聴覚教材を用いた講義など、通常の雨天時と同様の対応をした授業が多かったが、なかには熱中症そのものを教材化して授業を展開したケース（尾崎）もあった。この授業では、夏学期の最後の2回の授業を「猛暑のため教室で講義」とし、日本体育協会製作の「熱中症予防」のビデオを見せ、運動・スポーツにおける危険性とその予防の考え方について講義し、あわせて、現状では日常生活においても十分注意が必要であることも講義したが、「高校までは、そんな内容のことを話してくれないので新鮮であり、大学の講義らしかった」といった学生たちの評価が寄せられた。

今回のこの事例は、大学の必修体育の授業において教養として身につけさせるべきものは何か、という問題を改めて考えるひとつの手がかりとなるように思われる。われわれは、全学共通教育科目における運動文化科目の目的のなかで、「健康やスポーツ・運動文化に関する科学的、総合的認識と高度な教養を身につけること」もあげているが、熱中症のメカニズムや予防の方法などは全学生に身につけさせるべきものではないだろうか。それは「環境の変化や運動に伴う身体の変化」といったテーマの一部をなすものであり、「食生活・運動と健康」などの問題とともに、健康で文化的な生活を営む上で必要不可欠な知識といえるだろう。

「スポーツフィットネス」（岡本）では、身体データ（血圧・心拍数・体重・体脂肪率）の測定を行いつつ、夏学期には学生から出された希望実技種目の実践を、冬学期には健康法・ダイエット方法のグループワークを中心に授業を展開している。また、「バスケットボール」（ポルスター）では、ウェブ上でのルールや技術に関するテストの実施も構想しており、彼が実施しているコーディネーション・トレーニングやそのテストなど、参考にすべき実践もなされている。これらを手掛かりにして、今一度教養として身につけさせるべき具体的な内容について議論し、講義や測定等を組み込んだ新たな内容や授業スタイルを模索する必要があるのではないだろうか。

〈授業の工夫等〉

スポーツ方法の授業では、実に多様な取り組みや工夫がなされているが、以下、「教員アンケート」からいくつかピックアップしてみたい。

（1）グループ学習

とくに班分けや班運営などでいくつかの工夫が報告されている。班分けでは、経験者と未経験者が各班均等になるようにする、班を学部を基礎にしてつくる、逆に、できるだけ学部を混合させるなど。「フライングディスク」（岡本）では、メンバーのディスクの投距離（バックハンドスローとサイドアームスローの合計）が等しくなるようにするといった方法もなされている。こうしたさまざまな方法を実践し、それぞれがその結果を総括しながら、来年度に向けた取り組みを模索している。

班運営については、近年学生の集団運営力が低下していると感じている教員が多く、集団として機能しない班があったり（ポルスター）、リーダーの不在によって班活動がうまくいかなかったり、特定の仲間としゃべってばかりでグループ活動に大きな支障をきたしている（新村）といった報告がなされている。要するに、グループ活動を円滑に進めるために教員はさらなる創意工夫や努力が求められているということなのだが、たとえば、「ソフトボール」（菊地）では、未経験者が遠慮したり消極的にならないよう、また経験者が高圧的にでることのないようキャプテンはチームをまとめる係として設定し、未経験者にもキャプテンをさせるなどチーム内での主要な役割を与える、といったきめ細かな工夫がなされている。

他方では、「昨年長期欠席で単位を取得できなかった学生が、今年も受講し、また昨年と同じように5月末から長期欠席し始めたのだが、今年は班のメンバーが当学生に出席を何度も促し、学生が復帰、単位を取得した。グループづくりの大切さに改めて気づかされた1年だった」（鬼丸）という報告もなされている。

これまでの経験や上記のような工夫等に学びながら、われわれの授業方法の基軸をなすグループ学習のパワーを回復させ、さらに向上させていかねばならない。

(2)特別ルール

公認ルールをそのまま適用するのではなく、受講生の実態や授業課題等に合わせた特別ルールを作成し、それによるゲームを実施している例がいくつかみられた。

たとえば、「ソフトボール」（菊地）では、「レディースルール」を設け、①女子の打球は必ずワンバウンドで各塁へ送球しなければならない、②女子が外野手の場合、外野フライはグローブに触ればアウト、③女子が内野手の場合、打球を捕球したらアウト（送球はしなくてよい）、④女子がピッチャーの場合、ピッチャー返しを打ったら即アウト（少なくとも1イニングは女子にもピッチャーを経験させたかったので、危険回避のために適用）としている。また、「攻撃側は内野にゴロしか打ってはいけない」といったルールでゲームを実施し、チームでどのように点をとるかを考える、“考えて点を取るソフトボール”を実施している。

女子に対する特別ルールは、「バスケットボール」（ポルスター）でも“*No pressure to female players in the game*”といった形で実施されている。また、この授業では、6～7人にチームの人数を増やし、コートラインなし、ドリブルはなし等の特別ルールによるゲーム、スポーツ方法Ⅱの「サッカー」（ポルスター）では、戦術的な思考力のアップを目的とした4つのゴールによるゲームも行われている。

こうした事例は、チームゲームで獲得させるべき知識や体験させるべき内容等を考えるうえで示唆的である。

(3)実施種目の柔軟化

スポーツ方法Ⅰの授業は、「スポーツフィットネス」と「療育コース」をのぞいてすべての種目でクラスが構成されているが、いくつかの授業では、それ以外の種目も実施するなど柔軟な実践がなされている。

たとえば、「バドミントン」（鈴木）では、12月に1回、フェスティバルと称して各チームが提案するスポーツやレクリエーション（どろけい、バスケ、ドッチボール、ハンカチ落とし）を実施し、「ソフトボール」（鈴木）でも、冬にウォーミングアップのために時にはサッカーで体を温めたり、また趣向を変えるため、キックベースを1回、クリケットを4回（うち1回は

映像学習) 行っている。

<盗難の防止>

昨年度は、授業時間内の盗難が相次ぎ、運動文化教員室に報告があった分だけでも、計 9 日に及んだ。今年度は、各授業での周知や助手や作業員による東キャンパス体育館付近を中心とした不審者のチェック、西キャンパスの更衣室のカギ付きのロッカーの活用等によって盗難防止に努めた。結果、盗難の報告は 0 であった。こうした警戒を緩めることなく、来年度以降もつづけていくべきであろう。

(坂上康博)

(2) スポーツ方法Ⅱ

<夏学期の開講クラスと履修者数>

曜日・時限	種目	定員	履修者
月・3	テニス	30	8
火・2	サッカー・フットサル	34	9
	バスケットボール	32	16
火・3	ジョギング	30	27
	器械体操	20	5
水・1	バドミントン	32	29
木・2	野球	30	10
木・3	テニス	30	14
金・1	テニス	30	17
金・2	ゴルフ	20	21
	フライングディスク	30	17
合計		318	173

<冬学期の開講クラスと履修者数>

曜日・時限	種目	定員	履修者
月・3	テニス	30	17
火・2	サッカー・フットサル	34	27
	古武術	20	20
火・3	テニス	20	17
	バドミントン	32	32
水・1	バスケットボール	32	28
木・2	ソフトラクロス	30	20
金・1	テニス	30	31
金・2	ゴルフ	20	19
	フライングディスク	30	37
合計		288	248

スポーツ方法Ⅱは、夏学期に9種目、計11クラス、冬学期に8種目、計10クラスを開講した。登録者数は、夏学期が173名、冬学期が248名、計421名であった。スポーツ方法Ⅱの受講者数は、2004年度の621名をピークとして、2005年度537名、2006年度450名、2007年度485名、2008年度360名、2009年度396名と減少傾向にある。2010年度は421名と少し増加したが、急激な減少傾向の中にあることに変わりはない。

「スポーツ方法に関するアンケート」のなかで、スポーツ方法Ⅱの履修希望についても聞いているが、そこでもここ数年希望者の減少が見られ、2010年度のアンケートで、「ぜひ履修したい」と答えた者の比率は9.3%、「時間帯が合えば履修したい」21.4%、「やりたい種目があれば履修したい」18.5%となっている。ただし、見逃してはならないのは、これらを合計すると49.2%に達し、半分もの学生がスポーツ方法Ⅱの履修を希望していることである。潜在的な需要は決して低くはない。

「スポーツ方法Ⅱに関するアンケート」(詳細についてはⅡ-3「調査活動」参照)によって、スポーツ方法Ⅱの受講理由をみると、第1位が「健康体力の維持・向上」69.3%で最も多く、第2位が「種目が好き(やってみたい)」50.8%、第3位が「上手になりたい」36.3%である。このアンケート調査は、回答率が約4割と低いが、2年次以降の運動不足の解消や好きなスポーツの継続要求を読み取ることは可能であろう。スポーツ関係のクラブや同好会に所属していない学生たちにとっては、スポーツ方法Ⅱは、スポーツを継続的に実施する貴重な機会を提供するものとなっていると考えられる。

履修者の減少、とくに2~3年生の減少は、近年の不況や就職難のなかでの就職活動期間の長期化、それらを背景とした要卒単位取得の優先化などによってもたらされたものと思われる。夏学期の履修が非常に少なくなっていること、履修者の約半分が就職活動を終えた4年生で占められていることもそれを裏付けているといえる。

こうした現状を見据えつつ、さしあたりわれわれが成し得ることは、潜在的な需要をとらえて参加をさらに促すこと、冬学期の長期欠席者への対応等も含めて引き続き魅力ある授業を追究していくことであろう。なお、授業の概要や個々の教員の工夫や努力等については、以下の教員アンケートを見ていただきたい。(坂上康博)

〈授業に関するアンケート(2010年度)より〉

◇尾崎正峰

①スポーツ方法Ⅱ(器械体操:火3夏)

毎年のことであるが、体育の授業でマット運動をしてきた程度で、高校までの器械体操経験者はいなかった。参加者は少なかったが、モチベーションは個々に高く、それぞれの技術水準に合わせて積極的に練習に取り組んだ。

講義要綱に記し、また受講生の要望も高い「バク転」には全員がチャレンジした(教員の補助付)。受講の「リピーター」が2名。

②スポーツ方法Ⅱ(テニス:火3冬)

初心者、初級者を主に想定している旨を講義要項、シラバスにも明示しているが、今回もテニスサークル所属、あるいは高校までのテニス部経験者の学生が受講した。同時に、シラバスで想定し

たような「初心者・初級者」の履修も 5、6 名あった。

昨年度同様に、毎回、練習内容とその自己分析を記すファイルを各人で作成するようにした（用紙は教員側で用意した）。

最終レポートのテーマは、「授業による自分の技術の習熟度の変化」あるいは「テニスにおける「メンタル」な部分について」。

◇坂上康博

①スポーツ方法Ⅱ（サッカー・フットサル：火 2 夏）

受講者は 9 人。昨年と同様、人数の少なさに泣かされた。教員が毎回入っても、フットサルの人数にもならず、授業登録していない自分のゼミ生や受講生の友人などにも、何度か参加してもらい、5 人対 5 人のゲームができたこともあったが、4：4 でのミニゲームが大半だった。

②スポーツ方法Ⅱ（古武術：火 2 冬）

昨年の「剣道」の授業に引き続き、長谷川智氏に指導の協力をお願いした。

今回は、特定の流派武術の修得をめざすのではなく、体術、杖術、抜刀術、剣術などの多様な武術から、基本となる動作や技を実際に行ない、身体の運用法を学ぶ（自分の身体で試してみる）こと、また、他のスポーツや生活への応用等についても考えてみるということをメインに据えた、みんなで挑戦し研究するという「身体の動きを探究するゼミ」のような形で進めた。

武道場を使用した。柔道場と剣道場の両方が使えたので、受け身や投げなども行うことができた。11 月頃から気温がかなり下がったが、上方の窓を修理していただいたおかげで風の侵入を防ぐことができ助かった。

長期欠席者 4 名を除く 16 人は、みな意欲的で、出席もよかった。その他、登録していない学生 1 人、教員 1 人の継続的な参加もあった。

長谷川氏のキャラクターの魅力や指導力も大きい。何よりも実技の内容が毎回新鮮で、身体や動作についての新しい発見や驚きあり、それらをエネルギー源にして授業を進めることができた。

◇岡本純也

①スポーツ方法Ⅱ（フライングディスク：金 2 夏）

②スポーツ方法Ⅱ（フライングディスク：金 2 冬）

夏学期は 17 名の登録者、冬学期は 37 名の登録者があった。毎年冬学期には 4 年生を中心に履修者が多くなるのだが、10 名ほどがほとんど出席せずに期末を迎える。抽選科目でこのようなことが起こるのは問題であるが、何とかならないものか。

今年度はアルティメットを長年実践してきたという大学院生（ドクター 1 年）が教職の免許を取得するために夏学期・冬学期ともに受講した。リーダーシップ、指導力があり、彼を中心に授業は展開し、例年以上に受講生の技術の向上が図られたように思う。授業の雰囲気は夏・冬ともに非常に良好であり、受講生同士のコミュニケーションも活発に行われた。

◇坂なつこ

①スポーツ方法Ⅱ（バドミントン：水 1 夏）

珍しくリピーターが多く、クラス運営はスムーズに行えた。2 グループづくり、チームを固定して対抗戦という形で毎行った。ただ、就職活動などで欠席がちな4年生も多く、出席するメンバーはなかなか安定しなかった。経験者、未経験者、男女比も大きな偏りはなく、雰囲気も総じてよかった。ただ、テニス経験者が多く、バドミントンへの切り替えが困難そうであった。スマッシュ以外の決め球など、バドミントン特有の空間支配のおもしろさに気づく前に学期が終わってしまっており、来年度以降はプリントなども配布する工夫を考えたい。

②スポーツ方法Ⅱ（バスケットボール：水1冬）

例年通りリピーターが多かったが、女子の受講生が増えたことが好材料だった（4名登録、3名履修）。3人とも経験者でクラブに所属しているため、積極的なプレイで大きな不利もなかった。今年は冬学期には低温が続き、そのせいか出席者が安定しない時期が多かった。また、就活、卒論と4年生の履修も厳しかった。ただ出席する学生は熱心で、毎回最低でも10人はそろったので、沢山のゲームができてよかった。

◇鈴木直文

①スポーツ方法Ⅱ（野球：木2夏）

受講者が10名しかおらず、難しい運営を迫られたが、8名が常時出席をしてくれた。受講者と少ない人数で如何に野球らしいゲームをできるか、様々なルールを試した。野球は9対9という既成概念にとらわれることなく、楽しく進めることができた。

②スポーツ方法Ⅱ（ソフトラクロス：木2冬）

履修者が21名いたが、毎回入れ替わりで8人前後で行うことになった。女子ラクロス部出身者数名の他は初心者であったので、投げ方や基本的な戦術について学びながら、毎回試合形式で締めくくった。男女がほぼ半々の比率で、技術水準にも差がある中で、如何に全員が楽しめるようになるか、という観点で様々なルールを試した。最終的には特別な配慮をしなくても全員が楽しめるだけの技術を習得してくれた。

◇中澤篤史

①スポーツ方法Ⅱ（ジョギング：火3夏）

グループごとに地図を見てジョギングコースを考案し、国立市街を走った。学生もたのしく授業に参加していたようで、今後も継続したい。

②スポーツ方法Ⅱ（バドミントン：火3冬）

グループごとに分かれて練習を行った上で、団体戦・個別戦を行った。団体戦は非常に盛り上がり、学生も満足していたようだ。

◇Polster

①スポーツ方法Ⅱ（バスケットボール：火2夏）

This semester we struggled sometimes to reach full-5 member-teams. A couple of times we have

played only 4:4 games. The pleasure of this Sports-II class comes not just only from playing; - but also from knowing each other for some years. Even, master-course students take part. Mr. Sadoshima e.g. took this Sport II - Basketball course for the third time. Years before he has been an averaged Basketball skilled student. This time he could get the highest credit. This semester course brought also some students together, which were interested in my coordination training topics. Therefore I explained various methods of coordination training in general as well did we some sport-specific coordination exercises in Basketball.

②スポーツ方法Ⅱ（サッカー・フットサル：火2冬）

At the beginning surprisingly, a very good attended soccer class. There have been enrolled 21 students, which brought in additional 3 guest player (Hitotsubashi students). It is a sign, that even in Winter semester students have good desire to play soccer. There was one female student in the class, starting with not any soccer skills. Asking her about her motivation to take this class, she was very ambitious getting practical soccer experiences. Hence, she has been a positive member of the class and did even not pull-back during playing soccer in teams. Of course, we have applied some "Non-Pressure-Rules" for her too. Students showed much respect to the teacher, were supportive and communicative. I introduced a new game form: Playing soccer with 2 teams at 4 goals. Some good skilled students really had problems to adapt to this new way of tactical thinking. Thus, I could make them aware my opinion about sports: Challenging the head too - not just the body!

◇鬼丸正明

①スポーツ方法Ⅱ（テニス：木3夏）

登録者 14 名、そのうち全欠 4 名。単位取得者 8 名。例年に比べ登録者も少なくまた上級者も少なかったため、初心・初級者対象の練習に集中できた。また上級者も大変協力的だったので、充実した授業が出来たように思う。

◇柴崎涼一

①スポーツ方法Ⅱ（テニス：金1夏）

毎年 1 年目の方法Ⅱの授業では、学生をつなぎ止めるのに苦労しています。今回も 17 人の登録者がすぐに 11 人になってしまいましたが、残った学生たちは楽しくやってくれたと思います。

②スポーツ方法Ⅱ（テニス：金1冬）

夏期と同様にドロップした学生がかなり多く出てしまって残念ですが、天候にも恵まれたので熱心な受講生にとっては満足してもらえたのではないかと感じています。

③スポーツ方法Ⅱ（ゴルフ：金2夏）

このクラスは 20 人中 17 人が残り、皆学習意欲が高かったため充実した授業ができたと思います。外の練習場にも 2 回行きましたがなかなか好評でした。

④スポーツ方法Ⅱ（ゴルフ：金2冬）

夏期とほとんど同じ内容で進めましたが、3/4の学生が来なくなってしまい落胆しました。原因はよくわかりませんが、とりあえずガイダンスで最後まで続けることを強調してあとは授業中に対応するつもりです。

（3）スポーツ科学・健康科学

2010年度は、現代社会とスポーツ、ヒューマンセクソロジー、スポーツ文化、現代スポーツ論、運動と体力の科学、スポーツと映像文化、以上計6科目を開講し、受講者数は計1,180名であった。それぞれの授業については、以下の教員アンケートを見ていただきたい。

学期	曜日・時限	科目名	担当者	登録者数
夏	月・2	現代社会とスポーツ	岡本	144
	火・2	ヒューマンセクソロジー	村瀬	333
	木・3	スポーツ文化	坂上	112
冬	火・2	現代スポーツ論	坂	31
	木・2	運動と体力の科学	渡辺	171
	木・3	スポーツと映像文化	鬼丸	389
合計				1,180

〈授業に関するアンケート（2010年度）より〉

■現代社会とスポーツ（月2：夏）岡本純也

履修登録者 141名

まずは、プレイ理論、エリアスの文明化理論を紹介しつつ、スポーツがなぜ世界中に広まったのかについて考え、スポーツを分析する枠組みを提示し、その後、現代社会におけるスポーツをめぐる問題について検討した。

今年度の工夫としては、期末のレポートにおいて、コピー&ペーストをしにくいテーマを設定したことがあげられる。現代社会におけるスポーツをめぐる問題について論じさせたが、その際に、新聞記事をまず引用させ、その記事に書かれているテーマについて意見を書かせるようにした。このことにより、他人のwebサイトからのコピー&ペーストは減少したと考えられる（皆無ではなかったが）。

授業で取り上げた主なテーマは以下の通り。

1. ドーピング問題

近代スポーツは科学の進歩・技術革新とともに発展してきた。人々の勝利への志向性は新たな戦略を創りだし、新たな道具を開発してきた。また、技術者をとりまくコーチや学者はより大きなパフォーマンスを出すための科学的トレーニング方法を開発してきた。そのようなスポーツの技術革新の延長線上にドーピング問題は生じたと考えられる。現段階では競技者の健康を害するという点がドーピング禁止の最も大きな理由となっているが、もし、安全に能力を伸ばせる方法が開発されたらこの問題はどのようにとらえられるのであろうか。このように考えると、この問題は、健

康を害するから、ルールに違反するからという理由で「悪」と断じることのできない、スポーツという文化がもつ根本的問題としてとらえられる。

2. スポーツとメディアの問題

現在、メディアとスポーツの結びつきは強固なものとなり、放映権料の高騰やスポーツ選手に対する過剰な報道を引き起こしている。ここでは、スポーツとメディアの関係について、両者が普及する際、ごく初期の段階で深く結びついていたという歴史について提示し、現在のメディア・スポーツとスポーツビジネスの構造について理解する。

3. 日本的スポーツの崩壊と再生

これまで日本のエリート・アスリートは、主に、学校の部活と企業のクラブ（実業団）によって育成されてきた。昨今の経済不況によってもたらされた多くの企業クラブの休部・廃部は、従来型の日本的スポーツの構造を根本から崩そうとしている。2004年には、プロ野球のチームでさえ、オーナー企業の経営悪化を理由に統合や出資会社の変更などが行われた。一方で、プロ・スポーツ界に参入する企業が現れたり、新しいプロ・スポーツリーグが立ち上げられたりと、わが国のスポーツ界は、今、激しく変化している。ここでは、これまでの日本のスポーツの構造がどのようなものであり、今後、どのような方向へ向かおうとしているのかについて考えてもらう。

■ヒューマンセクソロジー（火2：夏）村瀬幸浩

熱心に聴講するとくに男子学生の様子が印象的でした。それが毎日新聞の記事につながりました（巻末資料参照）。

■スポーツ文化（木3：夏）坂上康博

スポーツに関する価値観（スポーツ観）の形成に大きな影響を与えている学校教育やメディア（マンガやアニメも含む）を一度突き放してとらえること、また、日本の社会や歴史の大きな流れの中から、あるいは外国との比較などによって、今までとちがった角度からとらえ直すことをめざして、以下のような内容で、各自の意見の発表や討論、グループワーク、ディベートなどを取り混ぜながら実施した。

評価は、授業中に課した小レポート（40点）、宿題小レポート（10点）、最終レポート（50点）とした。

- 第1回 小説「星野君の二塁打」—教科書の中のスポーツ
- 第2回 スポーツとメディア（その1）スポーツ中継を考える
- 第3回 スポーツとメディア（その2）感動の場面を見て考える
- 第4回 スポーツとメディア（その3）スポーツ中継の現場（ゲスト講師）
- 第5回 スポーツとメディア（その4）ディベート「アイドル等を用いた過剰な演出はやめるべき!？」
- 第6回 海外からみた日本のスポーツ
- 第7回 変化する日本のスポーツ
- 第8回 スポーツマンガの変化を追う（その1）
- 第9回 スポーツマンガの変化を追う（その2）
- 第10回 スポーツマンガの変化を追う（その3）宿題小レポート発表会①
- 第11回 スポーツマンガの変化を追う（その4）宿題小レポート発表会②

第12回 スポーツと競争

第13回 他人のレポートを読んで評価してみる

第4回の授業は、昨年に引き続き、実際にスポーツ中継を手掛けているディレクターの方に講義をお願いした。第2回からテーマをメディアに切り換えたのも、その日程に急遽合わせたためであったが、やはり中継の現場の話は知らないことが多く、迫力があり、学生の反応もよかった。

宿題小レポート発表会は、初めての試みであったが、学生たちのプレゼンは面白く、刺激的なものとなったと思う（評価用紙の準備等々課題も多いが）。

最後の授業は、とくに1年生にどのようにレポートを書けばいいのか、レポートのどんな点がどのように評価されるのか等を具体的に紹介し、受講生が共通理解するために試みたもので、これは好評だった。

■現代スポーツ論（火2：冬）坂なつこ

昨年と同様に、講義＋グループワークで構成した。昨年以上に出席者が安定せず、グループワークになってから3、4年生の就活（あるいは内定関係）の影響が大きかった。上級生の履修者がすくなくなかったため、グループワークにおける活動、発表についても差が大きかった。全体的にグループワークを行うことに限界が感じられた。最終レポートと出席時のコメント、グループワーク、発表で評価をした。レポートについては、授業中に時間をとって引用の仕方や問いのたて方などについて説明をしたが、結局はインターネットからの参照が多く（特に1年生）、今年もレポートの書き方について指導する必要性を感じた。

■スポーツと映像文化（木3：冬）鬼丸正明

本年も600名を超す学生がオリエンテーションに参加したので抽選を行い、420名程度受講を許可した。昨年度同様そのうち50名程度が受講せず。ただシラバスにも明記しているにもかかわらず本年も抽選に参加せずに登録してきた学生が相当数いた。そのうち数名は最後まで出席し続けた。講師が抽選を行い教務課掲示板に結果を掲示しているのに、大学が登録を受け入れているのは制度的ミスである。大きな問題が起こる前に早急な改善が望まれる。最終登録者389名、単位取得者376名。

授業内容はほぼ例年通り。ただし、映像をめぐる状況が年々変わってきており、ゲーム・ネットの映像に言及せずに、映像は語れないようになってきている。それに関わる言及をこれから増やしていくことになると思う。

（4）教養ゼミ

〈授業に関するアンケート（2010年度）より〉

●教養ゼミ（木2：夏）尾崎正峰

テーマ：スポーツと現代社会

受講者は1名。まず、内田義彦『読書と社会科学』（岩波新書）をテキストとして、学生のレポート、そして教員との意見交換という形から始めた。その後、学生のスポーツに関する興味関心に基づく報告と意見交換とした。日本のプロ野球のFA制度、メジャーリーグへの移籍の背景、球団

の経営力格差と実績との関係など多岐にわたった。

●教養ゼミ（火2：冬）鈴木直文

テーマ：フェアトレード

フェアトレードという現象について、食べ比べ、事例報告、理論的背景など、様々な切り口から検討した。約20名の大所帯だったので、個人報告は行わずグループ発表または毎回一つのテーマについて全員でディスカッションするようにした。

●教養ゼミ（火2：夏）中澤篤史

テーマ：人間理解のための生命科学

本授業では、生命科学の基礎を学びながら、人間を総体的に理解することを目指した。東京大学生命科学教科書編集委員会編集『文系のための生命科学』（羊土社、2008）のテキスト講読や、「人間を決定するのは、遺伝か！？ それとも環境か！？」の論点でのディベートなどで、授業を構成した。各回の内容によってばらつきはあったが、おおよそ活発な討論が繰り広げられた。

（5）教育社会学講義

学期	曜日・時限	科目名	担当者	履修者
夏	金・2	教育と社会*	中澤	220

*オムニバス講義で、講義2回を担当し、最後に担当教員全員によるミニシンポジウムを実施。履修者数は概数であり、合計には含めていない。

■教育と社会 中澤篤史（金2・夏）

履修者：220名程度

同講義は、教育と社会の関係を、多様な観点から考えるオムニバス講義である。中澤が担当した2回分の内容は、次の通りである。

①身体と教育（総論）：「身体教育をいかに構想するか」を原理的に考える

1. 「身体と教育」を論じるということ：身体を扱う諸科学の中で
2. 身体教育の限界と可能性：医学・生理学は遺伝の影響を示唆している、しかし…
3. 遺伝決定論のあやまり：遺伝はすべてを決定しない
4. 身体教育の構想：われわれはどのような身体教育をなぜ構想するのか

②身体と教育（各論）：学校体育・運動部活動・社会体育・リハビリテーション

1. 学校体育：なぜ学校に教科体育があるのか、教科体育は何をしてきたのか
2. 運動部活動：誰がなぜ参加するのか、誰がなぜ支えるのか
3. 社会体育：健康問題は誰にとって問題なのか
4. リハビリテーション：障害者・高齢者福祉に身体教育は貢献できるか

追記：この他に同講義のまとめとして、担当教員全員が一同に会して、ミニシンポジウムを行った。共通テーマは「教育の公共性を考える」であり、中澤は「障害をどう考え、障害にどう向き合うか」というタイトルで報告した。

B. 学部教育

(1) 学部講義

2010年度は、4つの講義を開講した。各講義については、下記の一覧を参照されたい。

〈授業に関するアンケート（2010年度）より〉

■社会学部講義・身体社会史（学部・大学院共修科目） 尾崎正峰（木1・夏）

履修：学部3名、大学院1名

「健康」をキーワードとするテキスト・リーディング、および個別発表を2つの柱として構成した。

テキストは、田中聡、他『健康ブームを読み解く』（青弓社）、上杉正幸『健康不安の社会学（改訂版）』（世界思想社）。

テキスト・リーディングでは、テキストを読み解くことはもちろんであったが、「健康であるとはどういうことか」等、ある意味、当然視していた「前提」についての問いから出発して、受講生相互の自由な討論を行った。

個別発表は、テキストに沿った「健康」について考えるもののほか、「バレエの歴史とバレリーナの育成システムの比較」、「スポーツのプロ化について」と多彩であった。

■社会学部講義・スポーツ問題の社会学 坂上康博（木4・冬）

履修：45名

テーマ：「新しいスポーツ雑誌をつくる——スポーツジャーナリズムの創造」

スポーツの現状についての理解を深めながら、〈スポーツという文化を未来に向けていかに継承し発展させていくべきか〉という問題を考えていく手がかりをつかむ、という大きな目標の下で、「新しいスポーツ雑誌をつくる」というテーマを掲げ、グループ研究を中心とした授業を実施した。具体的なねらいは、スポーツに関する各自の思考力や洞察力、そして表現力や発信力を鍛えること。

成績は、①毎回の小レポートやグループワークへの参加（40点）、②グループ研究レポート（60点）とした。

グループ研究では、(1)3～7人規模のグループをつくり、(2)企画を立案して調査・議論し、(3)雑誌（記事や論説などを含んだレポート）をグループ毎に仕上げ、(4)それを印刷・製本して全体でひとつの雑誌にまとめあげ、(5)各自がそれを読んで各グループの作品を評定し、(6)教員がそれを集計し、すべてのコメントを編集・印刷・配布した。日程は下記のとおり。

- ①10/7 オリエンテーション 「新しいスポーツ雑誌をつくる」
- ②10/14 講義(1) グループ研究を評価する、成績評価や日程に対する意見
- ③10/21 講義(2) スポーツメディア全体の中でスポーツ雑誌を考える
- ④10/28 講義(3) スポーツ雑誌の中でスポーツ雑誌を考える＊グループの結成！
- ⑤11/4 講義(4) スポーツ雑誌を読む、スポーツを言葉で表現してみる
- ⑥11/11 講義(5) 議論を楽しむ！ ディベートで深めるスポーツ問題
- ⑦11/18 グループ研究(1)

- ⑧11/25 グループ研究(2)
- ⑨12/2 グループ研究(3)
- ⑩12/9 グループ研究(4)
- ⑪12/16 各グループのレポートを一冊に製本、配布、班ごとのアピール
- *1/11 グループ研究の評価提出
- ⑫1/13 講義(6) クイズで考えるスポーツ問題
- ⑬1/20 まとめ、グループ研究の成績発表

実習型の授業を今回はじめて試みてみた。表紙デザインにも各班が相当こだわり、結局、研究室のプリンターでカラー印刷することになったが、こうした点も含めて、受講生の意欲は高く、グループによる集団的な作業も思っていた以上にスムーズに進め、1人の脱落者を出してしまったことは残念だが、全体としてなかなか見事な作品ができたと思う。

■社会学部講義・スポーツ社会学の基礎 坂なつこ (火2・夏)

履修：70名

テーマ：近代スポーツの特性とオルタナティブ

スポーツを現代社会の表層的な現象としてではなく、「社会的に」論じる視点を獲得するということを目標に、第一に、スポーツ社会学の歴史と課題、代表的な理論研究などについて論じた。さらに第二に、より具体的な事象をとりあげ、スポーツと身体との関係、近代スポーツの限界やオルタナティブな展開について論じた。

各テーマは、以下。

- ①スポーツとは
- ②遊びからスポーツへ（ホイジンガ、カイヨワなど）
- ③近代国民国家形成と身体（ビデオ：森有礼）
- ④民衆娯楽から合理的娯楽へ
- ⑤祝祭と権力：スポーツと文明化
- ⑥スポーツと暴力
- ⑦近代スポーツの特性
- ⑧ナショナリズム1
- ⑨ナショナリズム2
- ⑩ビデオ：ホームレスワールドカップ
- ⑪ジェンダー、マスキュリニティ
- ⑫障害者スポーツ
- ⑬メディア、グローバル企業とスポーツ

成績は、各回のコメント（毎回テーマを設定）と中間レポート+最終テスト。

各回のコメントやレポートではよく考察されているものも散見されるが、最終テストではスポーツを社会科学的に分析する力が獲得できていると考えられる答えはそれほど多くなかった。能力の問題というよりは、準備不足な印象がある。授業の構成も含めて、今後の課題。

■商学部講義・ツーリズム産業論 岡本純也（月4・夏）

登録人数：276名

本講義は日本ツーリズム産業団体連合会（TIJ）の寄附によって開講されたものであり、6年目となった（岡本担当になり4回目）。主に観光産業の実務に携わる方をゲスト講師で招き、この業界の現状と課題について講義していただくという形式をとっている。昨年の反省でも述べたように、このような外部講師による講義はそれぞれの講師の講義自体は非常に興味深いものでありながら、（形式として）学生の参加の度合いが低くなりがちであり、そこをいかにコミットさせるかということが4年間の担当者の試行錯誤の中心となった。ここで工夫して成功したと思われる試みを以下にまとめる。

まず、初回の授業において各回の講義の概要を説明し、自分の興味のある講師に対する質問を学生から回収し、学生がどのような点に興味をもっているのか、どの程度の知識を事前にもっているのかについて知らせるようにした。その成果として、講師によっては事前送付した質問に対して学生の名前を読み上げながら回答をするなどの工夫をされ、講義後の感想にも学生が引き込まれている様子うかがえた。

また、毎回、講義後に学生から出された質問を講師に送付して、回答をフィードバックしてもらった。そして、期末には以下のような課題を出し、それぞれの回で得た知識をより深められるように工夫した。

「ツーリズム産業論」の講義の中から2つ以上の講義を選択し、それらの授業の内容を踏まえた上で、以下2つのテーマのうち1つのテーマについて簡潔に論じよ。

- ①航空産業、鉄道事業、旅行業、ホテル産業（旅館業含む）のうち、いずれか1つを選び、現在の課題とそれを克服するための方策について論じよ。
- ②日本国内の任意の地域を選び、その地域の観光を活性化させるための方策について論じよ。

※A4版 2～3枚（4000字程度）

以上のような工夫により、学生の積極的で主体的な学習が促されると考えるが、このような授業を運営するにはチームでの担当が必要であり、その点で、TIJの担当者である橋本良介氏、松山尚之氏、ティーチングアシスタントの修士2年田中篤氏なくしては成り立たなかったと考えている。

【今年度のテーマと講師】

4/12 講義の目的と概要（岡本純也 一橋大学商学部）

4/19 日本の観光政策の概観（和田浩一 観光庁 観光地域振興部観光資源課長）

4/26 DMCとしての誘致戦略（深川三郎 JTBグローバルマーケティング&トラベル 代表取締役社長）

5/10 旅行産業における戦略と実践例（石黒祥隆 ㈱日本旅行 執行役員 海外旅行事業部長、
平田進也 同 西日本営業本部営業推進本部 担当部長）

5/17 ホテル産業論（塩島賢次 日本ホテル㈱常務取締役・ホテルメトロポリタン総支配人）

5/24 リゾート再生への挑戦 -成功の秘訣（星野佳路 ㈱星野リゾート 代表取締役社長）

5/31 国際空港の現状と未来（黒野匡彦 成田国際空港㈱ 特別顧問）

6/07 航空会社の国際戦略（小堤雅史 ㈱ANA 総合研究所 代表取締役副社長）

6/14 戦略的観光マーケティング（高松正人 ツーリズムマーケティング研究所 代表取締役）

6/21 鉄道会社の将来と経営人材（最明仁 東日本旅客鉄道㈱経営企画部観光プロジェクト次長）

6/28 観光地域づくりと人材育成（鶴田浩一郎（株）鶴田ホテル 代表取締役社長、NPO 法人ハットウオンパク代表）

7/05 MICE の現状と将来展望（太田正隆（株）ICS コンベンション デザイン コンベンション総合研究所 所長）

7/12 ツーリズム産業の展望（船山龍二 TIJ 会長）

7/26 全体のとりまとめ（岡本純也 一橋大学商学部）

（2）学部ゼミ

各ゼミの間の交流を図るため、昨年は社会学部の 4 ゼミによる懇親会を開催したが、今年度はそれに研究発表会を新たに加えて実施した（7 月 7 日）。また、一橋大、福島大、立命館大、中央大、埼玉大、尚美学園大の計 6 大学合同ゼミ（12 月 11 日～12 日、オリンピック記念青少年総合センター、計 84 人参加）のホスト校を一橋大が務め、尾崎、坂上、坂、岡本の 4 ゼミが参加し、研究発表、全体レクリエーション、懇親会等を行った。なお、5 月には岡本ゼミによるバーベキューに坂上ゼミが合流した。

これらの企画は、学生たちの個々の研究にとっても、また、企画運営力を鍛えるといった面や交流などの点で刺激的であり、教育的な効果が大きく、継続的な開催を追求すべきである。

（坂上康博）

〈授業に関するアンケート（2010 年度）より〉

●社会学部ゼミ 尾崎正峰（木 4・5）

履修：3 年 2 名 4 年 2 名

3 年ゼミは「地域調査」がテーマであるため、夏学期はそのための議論を中心とした。4 年生は昨年度経験しているため、そのことの「実感」もふまえて議論を行った。その結果、今回の調査対象は、FC 東京とすることとした。

冬学期以降は、第一に、「地域調査」における、具体的な質問項目の検討。第二に、12 月の合同ゼミ（一橋・立命館・中央・福島・尚美大学）に向けての準備（発表レジュメは、参加・発表をする 3 名分をまとめて、印刷・合本した）。第三に、今年度卒業予定者は 1 名だったが、その卒論に関する検討、を行った。

●社会学部ゼミ 坂上康博（月 5）

履修：5 名

テーマは「スポーツと大衆文化の変化をとらえる」。履修者は 3 年生 3 人、語学留学からもどつた 4 年生 1 人、中国の交換留学生 1 人の計 5 人。そこにチューター役として、2 人の大学院生が参加。各自の卒論をにらんだ研究発表と討論を中心に進め、その他に坂上とチューターの院生も報告した。

●社会学部ゼミ 坂なつこ（木 4・5）

履修：4 年 3 名、3 年 1 名、（1 名留年）

テーマ：スポーツおよびレジャー社会学

3年ゼミでは、『職業としての学問』(M.ウェーバー)、『空想より科学へ』(エンゲルス)、『社会学の根本問題(個人と社会)』(ジンメル)らを読み、社会構造と個人の関係に焦点をあて議論を行った。『社会学の根本問題』からは院生1名が参加してくれたので、より幅広い議論が行えてよかった。また、後半はゼミ生の興味のある分野(余暇・レジャー活動)について報告してもらい、『余暇と祝祭』(J.ピーパー)、『スポーツ・レジャー社会学』の序章、さらに『Decentring Leisure』(C. Rojek)を読み始めた。

4年ゼミでは、卒論作成の準備のため、各自の関心に基づいて報告を行った。

卒論テーマ：『イングランドとアメリカにおけるメジャースポーツ比較』

『戦前日本のアメリカンフットボール史研究』

●社会学部ゼミ 鈴木直文(月4・5)

履修：3年8名

テーマ：余暇スポーツと社会改善プログラム

余暇やスポーツ活動の要素を利用した社会改善プログラムについて学んだ。夏学期は、各自がみつけてきた事例を報告し、それについて全員で議論する形式をとった。4回の報告毎に総合討論を行い、報告と議論の質が高まるための相互学習の促進を図った。8人全員が報告を行った後は、集めた事例から導かれる一般的な知見を皆で抽出した。夏学期の成果は、合同ゼミのグループ発表としてまとめた。

冬学期は、夏学期で到達したことを出発点に、理論的な学習を進めた。夏学期で学んだこととこれから学びたいことについて討議した後、組織論グループと社会問題グループに分かれてそれぞれ4回の報告と1回の総合討論を行った。組織論グループでは、組織論全般、日本における組織形態などについて学んだ後、実際の社会改善プログラムの組織形態を分析した。社会問題グループでは、社会問題の定義や歴史、規範的議論などを学んだ。それぞれ学んだことを総合して、介護問題を例にどのような改善プログラムが可能かを議論した。最終的な成果として各自の関心のある問題を選んでオリジナルの社会改善プログラムの提案を行い、オープンゼミの場で発表した。

●社会学部ゼミ 中澤篤史(金2・夏)

大学院ゼミと合同で開催。内容はそちらを参照。

●商学部ゼミ 岡本純也(木4・5)

登録人数：4年8名 3年5名 履修人数：13名

昨年に引き続き博士課程の院生がTAに入り、また、坂上ゼミから修士1年生の参加があり、今年度も充実したゼミとなった。今年度も毎回担当を決めて議事録を書かせ、それをメーリングリストに流し、また、ブログにそれを掲載させた。このように作成されたデータベースは、ゼミの活動記録としてだけでなく、現在のゼミ生の学習を促すものとして利用できる(たとえば、ゼミの中の議論について、昨年も同様な議論をした場合にはその回の議事録も参照せよとアドバイスできる)。

3年生のゼミでは、昨年度の卒業論文と過去の院生の修士論文から読み始め、まずは目指していくゴールについて見通しをつけさせるとともに、ゼミで行う研究とはどのようなものであるかについて学習させた。その後、エリアス&ダニング『スポーツと文明化』、Lisa Pike Masteralexis eds.,

Principles and Practice of Sport Management などを読んでいった。

冬学期には、藤本 隆宏他『経営学研究法』などを読みつつ、沖縄にて開催された「美ら島オキナワセンチュリーラン」のフィールドワークの準備ならびにまとめの作業を行い、年度末の卒論発表会にて報告を行った。年度末には報告書をまとめる予定である。

4年生のゼミでは、基本的に卒論の検討を行い、夏休みには軽井沢で卒論検討会を実施した。そして、2月に学外者を招いた卒論発表会の場で各自報告を行った。

卒論発表会の演題は以下の通り。

<3年生による研究発表>

『美ら島オキナワ センチュリーラン』のマーケティング」

『ツール・ド・おきなわ』の経済効果」

<4年生の卒論発表>

「婚活の心象改善におけるスポーツの有効性～婚活シートという選択肢～」

「ビジネスモデルから見るスタジオジブリの成功要因」

「なぜ、人は踊るのか？～ストリートダンスを続けるために～」

『観るスポーツ』としてのフットサル～真のメジャースポーツを目指して～」

「The future of Street Basketball」

「面白いドラマを作るには」

「Jクラブの地域活性化の方策～非本業活動の有用性～」

<博士論文中間発表>

「実業団陸上部運営におけるマラソン、駅伝の両立の難しさ：監督の指導能力を原因としない視点での考察」

C. 大学院教育

(1) 大学院講義

〈授業に関するアンケート（2010年度）より〉

■大学院講義 尾崎正峰（水2・冬）

講義テーマ：地域スポーツ論

受講生は1名（M1）。

最初に、院生の問題関心、研究テーマに関する発表を行ってもらった。

（そこに直接関係するものではなかったが）イギリスのスポーツ政策の展開過程に関する英語文献を選び、テキスト・リーディングを行った。形式としては、「概要」報告ではなく、「逐語訳」とした。適宜、その文章の背景となっているイギリスのスポーツ状況、政策の展開、および理論等について説明（講義）を織り交ぜた。

■大学院講義 鈴木直文（水2・夏）

講義テーマ：国際スポーツ論

履修：4名

都市とスポーツの世界動向と題し、①都市経済へのスポーツの影響、②都市文化としてのスポーツ、③都市問題解決手段としてのスポーツ、という 3つのサブテーマを設けた。まず各テーマについて指定する論文を皆が読んできて、全員でディスカッションを行った。その後、各自が興味をもったテーマについて論文を探して提案し、同じように全員でディスカッションを行った。英語の文献を中心に扱ったが、皆意欲的に取り組み、ある程度深い議論を毎回行うことができた。

■大学院講義 中澤篤史（月 3・夏）

講義テーマ：教育保健論（体育思想の系譜） 履修：1名
大学院ゼミと合同で開催。内容はそちらを参照。

■大学院講義 岡本純也（木 2・夏）

講義テーマ：スポーツ・マネジメントの現状と課題
登録人数：2名 履修人数：2名

今回は他のゼミから1名の受講があり、私のゼミ生と合わせて2名で、主にジャーナル論文を輪読し、スポーツ・マネジメントという歴史の浅い研究領域の現状と課題について議論した。かなりの速度で大量の論文を読んでいったのでハードであったが、学生ともども勉強になった。読んでいった文献リストは以下の通り。

- 4月15日 Chalip, L.(2006). Toward a distinctive sport management discipline. *Journal of Sport Management*, 20, 1-21.
- 4月22日 Coakley, J. (2007). *Sports in society* (9th ed.). Chapter 1 and 2.
- 5月6日 Frisby, W. (2005). The good, the bad, and the ugly: Critical sport management research. *Journal of Sport Management*, 19, 1-12.
- Slack, T. (1998). Is there anything unique about sport management? *European Journal of Sport Management*, 5, 21-29.
- 5月15日 Kellett, P. (2000). Organisational leadership: lessons from professional coaches, *Sport Management Review*, 2, 150-171. Chambliss, D. F. (1989). *The Mundanity of Excellence: An Ethnographic Report on Stratification and Olympic Swimmers*.
- 5月20日 Pfeffer, J. and Salancik, G. R. (1978). *The External Control of Organization*. Harper & Row, Chapter 1. Koski, P. (1995). Organizational Effectiveness of Finnish Sports Clubs. *Journal of Sport Management*, 9, 85-95.
- 5月27日 Thompson, J. D. (1967). *Organization in Action*, McGraw-Hill, Chapter 1 and 2.
- 6月10日 Sherry, E., Shilbury, D. and Wood, G. (2007). Wrestling with "conflict of interest" in sport management. *Corporate Governance*, 7, 267-277. Sherry, E. and Shilbury, D. (2009). Board Directors and Conflict of Interest: A Study of a Sport League. *European Sport Management Quarterly*, 9, 47 - 62.
- 6月17日 David, B. J. (1984). The Importance of Boundary Spanning Roles in Strategic Decision-Making. *Journal of Management Studies*, 21, 131-152. Schwab, R. C., Ungson, G. R. and Brown, W. B. (1985). Redefining the Boundary Spanning-Environment Relationship. *Journal of Management*, 11, 75-86.

- 6月24日 Godfrey, P. C.(2009). Corporate Social Responsibility in Sport: An Overview and Key Issues. *Journal of Sport Management*,23,698-716.Ferkins, L., Shilbury, D. and McDonald, G.(2009). Board Involvement in Strategy: Advancing the Governance of Sport Organizations. *Journal of Sport Management*,23,245-277.
- 7月1日 ×Smart, D. L., & Wolfe, R. A. (2000). Examining SCA in intercollegiate athletics: A resource based view. *Journal of Sport Management*, 14, 133-154.Gerrard, B.(2005). A Resource-Utilization Model of Organizational Efficiency in Professional Sports Teams. *Journal of Sport Management*,19,143-169.
- 7月8日 Berman, S. L., Down, J. et. al. (2002). Tacit knowledge as a source of competitive advantage in the National Basketball Association. *Academy of Management Journal*, 45(1), 13-21. Stern, R. N.(1981). Competitive Influences on the Interorganizational Regulation of College Athletics. *Administrative Science Quarterly*,26,15-32.
- 7月15日 Harder, J. W.(1992). Play for Pay: Effects of Inequity in a Pay-for-Performance Context. *Administrative Science Quarterly*,37,321-335.Pfeffer, J. and Alison, D.-B.(1986). Administrative Succession and Organizational Performance: How Administrator Experience Mediates the Succession Effect. *The Academy of Management Journal*,29,72-83.

(2) 大学院ゼミ

〈授業に関するアンケート（2010年度）より〉

●大学院ゼミ 尾崎正峰（水1）

講義テーマ：「現代社会とスポーツ」 履修：1名

博士論文執筆に向けての個人報告とその検討がメインであった。

それ以外にも、学会への投稿論文、学会が関わるテキスト本への執筆など、執筆活動を盛んに進めているため、これに関する検討も随時行った。

●大学院ゼミ 坂上康博（月1）

講義テーマ：「日本の近現代を中心としたスポーツの社会史」 履修：9名

受講生の都合に合わせて、木曜5限に開講することが多かった。上記の9名の他、他大学の院生5人、その他修了生1人も随時参加。

ゼミの内容は、各自の研究報告と討論。昨年、研究報告と討論が2時間以上に及ぶことがしばしばあったので、効率化のため、資料をあらかじめ添付ファイルで全員に送付し、事前に読んでくるようにした。12月のスポーツ史学会には、5名の院生が参加し、2人が研究発表を行なった。

●大学院ゼミ 坂なつこ（月5）

講義テーマ：エリアス、ルーマンなど 履修：3名（うち1名は履修外）

博士論文や、修士論文のテーマ、現在関心のあるテーマから各人に報告をしてもらった。共通のテキストなどは設定しなかったが、次のテキストを輪読した。

●大学院ゼミ 鈴木直文 (木 4)

受講者なし。

●大学院ゼミ 中澤篤史 (月 5)

受講生 2 名 (学部生 1 名と外部聴講生 1 名を加えて、計 4 名で開催)

本ゼミナールでは、〈身体教育〉＝「身体のあり方に対する意図的な介入」を、多様な立場と方法論から総合的に考えることを目的としている。研究対象は、体育・保健・運動部活動・スポーツ・身体文化・健康・障害・リハビリテーション・介護・医療・福祉などである。

本年度のゼミは、文献講読と個人研究発表で構成した。文献講読は、夏学期に「体育思想の系譜」をテーマにして、ロック『教育論』、ルソー『エミール』、スペンサー『知育・徳育・体育論』を講読し、冬学期に「障害・障害問題を考える」をテーマにして、佐藤久夫『障害構造論』、上田敏『ICF の理解と活用』、上田敏『リハビリテーションを考える』、茂木俊彦『障害児と教育』、福島智『盲ろう者とノーマライゼーション』、石川准・長瀬修『障害学への招待』、石川准・倉本智明『障害学の主張』を講読した。個人研究発表は、それぞれの関心に沿って行い、問いが魅力的か、方法論が適切か、データの扱いが妥当かなどを論点にして議論した。

●大学院ゼミ 岡本純也 (木 3)

博士課程の院生が 1 名。修士論文と大きくテーマを変更したため、かなり速度をあげて調査を行った。研究テーマは絞り込めたが、それが商学・経営学に対してどのようなインパクトをもつものであるのか、その位置づけをするのに日々格闘している。彼はサブゼミで経営戦略論をテーマとするゼミに参加しており、その場での議論が大きく彼を成長させている。

3. 教育条件の整備・拡充

(1) 教育担当副学長との情報連絡会及び体育館増改築要求

2009 年度末に教育担当の盛副学長宛に提出した「体育館の増改築およびスポーツ施設エリアの整備についての要望書」(2010 年 1 月 18 日提出、以下「要望書」)について、継続的な話し合いが行われた。

6 月 1 日 盛副学長との情報連絡会

出席：盛副学長、筒井大教センター長、教務課長、教務課総務係、
施設課長代理、学生支援課課外支援主担当、(運動文化 8 名)
内容：「要望書」の検討状況と今後の見通しについて

10 月 13 日 盛副学長に対しメールにて「運動施設に関する WG 設立のお願い」を申し入れ
(返信なく、その後 10 月 27 日に口頭にて申し入れ)

- 11月30日 学生支援課長より空手道場の建替えが役員会で承認された旨、連絡有
- 12月8日 空手道場建設について、盛元副学長との会合
 出席：盛元副学長、落合現副学長、学生支援課長、(運動文化1名)
- ・副学長との情報連絡会(12/14)に引継ぐ旨を要請
  - ・過去、頭ごしに運動施設問題が進められてきたことに関して抗議
- (過去の事例) ①国際研究館建設のためテニスオムニコート縮小 1999年度
 ②ボクシング部室建設(田崎副学長) 2006年度
 ③第3研究館建設(盛副学長) 2009年度
 ④空手道場建設(盛副学長) 2010年度
- ・元副学長より説明と謝罪あり
  - ・空手道場の建設位置が記された図面とOB会への回答書案の提出要請
  - ・大学と空手部OB会とで交わす確認書の運動文化エリアとの事前協議要請
- 12月14日 落合副学長との情報連絡会
 出席：落合副学長、筒井大教センター長、学生支援課長、学生支援課、
 教務課長、施設課長代理、(運動文化7名)
 内容：1.「要望書」の検討状況と今後の見通しについて
 2.東キャンパススポーツ施設エリアWG(仮称)の設置要望
- 12月27日 落合副学長・運動施設視察
 参加：落合副学長、学生支援課長同行、(運動文化5名)
 視察場所：東エリア(運動文化教員室、教員更衣室・体育館・更衣室・倉庫、
 有備館、テニス・バレーボールコート、ゴルフ練習場、空手道場、
 ボクシング部室、部室棟)等
 西エリア(陸上競技場、硬式野球場、ハンドボールコート、如意団
 等の部室)等
- 3月4日 落合副学長より、以下の内容の連絡あり(室長宛)。
1. 空手道場をワンゲルや如意団の部室のある硬式野球場奥のエリアに移設案
  2. 運動スポーツ施設を含む東キャンパスの利用に関するWG発足
- 3月23日 施設マネジメント委員会(室長オブザーバー参加)
 *空手部道場の移転先決定：上記1.

当初、年度開けを目処にWG設立にむけた働きかけを行うことを想定していたが、落合副学長の迅速な対応により年度内に立ち上げが決定し、課外活動施設等検討WGには岡本室長が運動文化科を代表して参加する予定。運動文化科としては、西キャンパスを含めた総合的な整備を考慮した上で、同WGに対して提案を行っていくことが求められる。

(2) 陸上競技場フィールドの整備

西キャンパスの陸上競技場のフィールド部分は、表面の状態が劣悪で安全上大きな問題があった。夏学期中、フライングディスク(岡本)やサッカー(坂上、ポルスター)の授業で窪地に足を取られたことによる怪我が多発した(骨折者3名を含む)。応急的措置として、運動文

化科で黒土を購入し、7月27日にスタッフが自ら窪地に土を入れて整備した。

この件は教育担当副学長に報告し、対応について検討することになった。業者の見立てでは、部分的な補修工事ではなく全面改修が必要な状態ということだったが、予想される工事費用が4～7000万円と高額になることから見送られた。

9月27日には草刈り（例年2回実施のうちの2回目）が行われ、1cmほどに短く刈り込んだ上で土の露出した部分に洋芝の種が蒔かれた。2011年3月現在、芝が根付いた様子はない。

学生の安全に大きく関わることであるので、早期の全面的整備が望まれる。よって、平成23年度の大学戦略推進経費について、西キャンパス陸上競技場フィールドの整備（平成23年度「教育研究環境整備費」要求書：p.32参照）を要求することとしたが、そのためのヒヤリングがもたれた（2011年3月17日）。

（3）運動スポーツ施設使用を巡る学生との協議・調整

冬学期初め、月曜1、2限、火曜1限のソフトボールの授業中に硬式野球部が野球場の周囲で午後に行う公式戦の準備のために集まっており、授業に支障を来すことがあった。火曜1限（鈴木）の授業を教室で行った際、同時刻に硬式野球部が野球場で試合に備えた練習を行っていたことから、公式戦を平日の授業時間に行っていることが発覚した。

10月14日に運動文化教員室に代表者（主務および鈴木担当クラスの硬式野球部員）を呼んで岡本、坂上、鈴木で事情を聴取した。試合時間自体が授業と重ならないことは当然として、開始前の準備も授業中の学生を無意識にでも威嚇するようなことの無いように配慮する旨を伝え、午後に試合を行う場合、事前に学生支援課を通じて連絡する旨、指示した。

また例年通り、課外活動との運動施設利用調整会議を12月14日におこなった。落合副学長、運動文化科スタッフ、学生支援課（課長、係員） 学生12団体（呼びかけた16団体中）が出席した。岡本室長より来年度の時間割を説明した後、各団体との質疑応答が行われ、次の点が提起された。

- ・ハンドボール部（折りたたみゴールポストの問題）
- ・ダンス部（館内倉庫での物品（音響設備/スピーカー）盗難・損壊問題）
- ・陸上競技部（授業以外での使用の問題）
- ・ソフトテニス部（クレイコートのオムニ化要求）
- ・学生自治会（体育館更衣室での盗難の問題）

（4）その他の運動施設等の整備

体育館

- ・体育館男女・教員更衣室のカーテン取換え（2010年5月24日）
- ・体育館フロア入口ドアの修理（2010年5月24日）
- ・体育館及び西キャンパス女子更衣室に個人用カーテン設置（国際養育センター教員より依頼：留学生の宗教上の問題）（2010年6月16日）

平成 23 年度「教育研究環境整備費」要求書

【概要・必要理由】

(要求の概要)

- (1) 西キャンパスにある陸上競技場のトラック内のフィールド部分で土がむき出しになった窪地の箇所を整地し、そこに芝生を植えて全体として平らにすることを要求する。
- (2) 安全・安心な教育環境という観点からするならば、トラック内のフィールド全面の整地と芝の張り替えが必要であり、今回の要求が実現したとしても「対症療法」的な範疇にとどまるものである。全面整備には多大なコストがかかることから、今後、抜本的な整備についての検討を関係部署において推進することも合わせて要求する。

(必要理由)

- (1) 現在の陸上競技場のフィールドは、部分的に芝が剥げて土がむき出しになり、場所によってはかなり深く窪んでいる。雨が降るとこの部分がぬかるみ、芝の部分が濁った状態になってもグラウンド全体が使用できない状態が長く続いてしまう。また、冬季には土が出た部分には霜が降りるため使用できなくなることが多い。
- (2) 何よりも授業を行う上で心配なのは、フィールド部分の凸凹に起因すると考えられる怪我が多く発生していることである。現在、陸上競技場のフィールド部分では、スポーツ方法Ⅰのサッカー（5クラス）、フライングディスク（1クラス）、スポーツフィットネス（1クラス）、スポーツ方法Ⅱのサッカー・フットサル（2クラス）、フライングディスク（2クラス）、ソフトラクロス（1クラス）の授業が行われているが、22年度には、授業中に怪我をする受講生が相次いだ（骨折者3名含む）。
- (3) 毎年、陸上競技場の整地については教務課を通じて要請しているが、そこに充てる予算がないとのことで、大学が土を購入し、運動文化科教員が窪地に土入れをする作業を行っている（このような作業は本来教員の業務ではないと考えるが、安全な授業遂行に責任を負う立場から、カリキュラム改革・キャンパス統合に伴って国立キャンパスで実技の授業を実施するようになって以後、継続的に作業を行っている）。
- (4) 今後、上記のような不十分な対処しか行なわれず、現在のフィールド部分のコンディションが改善されないままでは、22年度と同様な怪我人が多発した場合、大学側の管理責任が問われても致し方ないとする。学生が安心して安全に授業を行えるグラウンドコンディションの維持は、大学の最低限の責務であろう。

【狭隘度、緊急性、効率性等】

- (1) 現在、陸上競技場を使用する授業は、スポーツ方法Ⅰで7クラス、方法Ⅱで5クラス開講しており、総受講生数は方法Ⅰが約300名、方法Ⅱが約150名である（2010年度）。
- (2) これほど多くの受講生を陸上競技場で行われる種目に振り分けているのは、小平から移転して以降、体育館の種目を減らさざるを得ない状況であるためであり、新体育館建設のコストを考えた場合、良好なグラウンドコンディションの維持にかかるコストはごく僅かである。
- (3) 今回は怪我人の続出という事態を受け「教育研究環境整備費」を充てていただけるよう要求するが、これはあくまでも緊急避難的な措置であり、できうるならば別途予算を確保して大規模なグラウンド整備を行うことが望ましいと考える。

- ・ 有備館（柔剣道場）の窓の修理（2010年10月19日ー一部未解決）
- ・ 体育館防球ネット修理依頼（2010年12月24日ー未解決）
- ・ 体育館男子更衣室に製氷機設置（2011年3月18日）

屋外施設

- ・ 陸上フィールド草刈り（1回目2010年6月20日実施）、（2回目2010年9月27日実施）
- ・ テニスコート・バレーコート整備（2010年7月24日～8月16日実施）
- ・ サッカーゴールネットの破損（2011年1月4日授業時発見ー1月31日教務課新品購入）
- ・ 屋外時計（陸上競技場の調整 2010年9月28日）（テニスコート脇未解決）

テニスコート周辺の木の剪定依頼（2010.11.15ー未解決）

教務課から施設課へ連絡済み、H23年度4月再申請予定（2011.2.16 教務課確認）

教員室設備関連

- ・ カラーレーザー複合機購入（2010年12月27日）
- ・ ブルーレイレコーダー購入（地デジ対策用）（2011年1月6日）
- ・ 教員更衣室シャワー給湯器更新（2011年2月4日）ー1990年度（H2年度）設置分。
- ・ 火災報知機の設置（2010.7.12 依頼ー未解決）
- ・ 今後：地デジ対策用のテレビモニター購入 等

（5）今後の課題

本学国立キャンパスの運動施設は、適切な教育を行う上で質量ともに課題を抱えている。現状では多くの施設は老朽化が著しく、十分なスペースも設備も整っていない。屋内施設は東キャンパス体育館（バスケットボールコート1面分）だけであり、雨天時や酷暑、寒冷の際の授業運営に支障をきたしている。

あらゆる科目と同様、スポーツ方法においても計画的に授業を進めることは受講者の学びにとって不可欠であるが、天候に左右されることでアドホックな対応を常に迫られている。このことは全天候型（人工芝）の屋外運動場と、バスケットボールコート2面分のフロアとミーティングルームを備える体育館があるだけで大幅に改善される。

また受講者および教職員の安全衛生上の問題が大きい。整備の不十分な陸上フィールドの危険性は上述の通りである。熱暑寒冷対策は、屋外は元より体育館にも備わっていない。運動文化教員室は1996年以来のプレハブのまま据え置かれ、火災探知機すら設置されていない。労働環境として極めて劣悪であると言わざるを得ない。

心身両面で学生のニーズが多様化していることも、考慮しなければならない。施設の制限のため集団スポーツ中心の科目編成になっているが、ウェイトトレーニングやヨガ・ピラティスといった種目が可能な設備があれば多様な個人のニーズに対応することが可能になる。多目的に使用できるアクティビティスタジオとウェイトトレーニングルームを備えた新しい体育館の整備が望ましい。

同時に、最低限の安全衛生と教育効果を維持するために、当面は細かな維持修繕をしっかりと繰り返していくことも怠ってはならない。

（鈴木直文）

II. 教育部活動

1. 実践交流会

(1) 新種目開発～ソフトラクロス～

6月22日に平成年度1回目の実践交流会として、ソフトラクロスを行った。冬学期にはスポーツ方法Ⅱとして開講した。

実践交流会は、概ね次のように進めた。場所はバレーボールコートを使用した。

1. ネットに向かって投げる練習
2. 対人でのキャッチボール
3. スクープ（地面にあるボールを掬い上げる技術）練習
4. 3対3のミニゲーム

ソフトラクロスはスタッフの全員が初体験だったので、適宜簡単な技術指導を行った。

冬学期のスポーツ方法Ⅱは21名が履修し、12名が単位を取得した。女子ラクロス経験者数名以外は、未経験者であった。学期はじめに雨天が多かったことから実質的な受講者の数が少なくなったと思われる。

毎回の授業の流れは次の通り。

1. 各自ゴールに向かってシュート

目的：①道具の扱いに馴れる、②身体を温める、③相手を気にせず強いボールを狙ったところに投げてみる、④各自の投げ方の癖を把握し、改善する。

2. ストレッチ

3. 対人キャッチボール

目的：①止まった状態でのパス&キャッチ、②特にキャッチのポイントを指摘

4. 歩きながらの対人パス

目的：進行方向に対して左右にいる味方に対するパス

5. スティックハンドリング練習（1人→グループ）

目的：スティックでボールを扱うことに馴れる

6. 実戦的シュート練習（2人1組→2対1）

目的：①味方からパスをもらってシュート、②より確率の高いシューターの選択

7. ゲーム

形式は出席者数に応じて3対3から5対5。ルールとして、接触プレーは常に禁止したが、他は以下の①～③の組み合わせを中心に様々なバリエーションで行った。①走る速さの制限：(A)早歩きまたは(B)制限なし。

②シュートをしてよい条件：(a)一定回数以上のパスが繋がること、(b)チーム全員がボールに触れること、(c)制限なし。

③オフサイドルールの有無

受講者全員、皆が楽しむことができるような条件を模索する意欲を示してくれた。最終的には全員のスキルレベルが一定以上になったので、制限を設けなくともそれぞれがチーム内で役割をみつめながらプレーすることができるようになった。

来年度以降の課題は、より発展的な内容に到達することである。今年度は天候等の理由で実技を行う回数が限られてしまったことが響いたので、来年度は室内で行うこととした。

(鈴木直文)

(2) 新種目開発～古武術～

10月19日(火)の15時から、職員集会場の大広間にて約2時間にわたって、今年度2度目の実践交流会を開催した。

内容は、今年度新たに開講した「古武術」(冬学期 火曜2限)の授業を、昨年「剣道」の授業に引き続き指導をお願いしている長谷川智氏に紹介していただいた。

「古武術」の授業は、特定の流派武術の修得をめざすのではなく、体術、杖術、抜刀術、剣術などの多様な武術から、基本となる動作や技を実際に行ない、身体の運用法を学ぶ(自分の身体で試してみる)こと、また、他のスポーツや生活への応用等についても考えてみるということを中心に据え、みんなで挑戦し研究するという「身体の動きを探究するゼミ」のような形で進める、というものであり、その内容は大きく以下の3つに分かれている(シラバスより)。

①古武術の基本動作:身体の各部を動かす。身体の内部を動かす。うねらない、ねじらない、ためない動作。バラバラ(上体と下肢の動き等)に切り離す。他の箇所を動員しブロック化する。膈下丹田の意識化。膝抜き=落ちていく瞬間の活用。気配を消す。相手の反射を利用する。相手が崩れるポイントを知る。体全体の連動させた楽な動き。

②身体各部の構造を知る。

③身体のケアの方法を知る。

授業では、上記のうちの①「古武術の基本動作」がメインとなるが、この日の実践交流会では、それについてはナンバ走り等の簡単な紹介にとどめ、参加者のニーズに合わせてもつぱら③「身体のケアの方法」を実践した。身体の左右のアンバランスのチェックと修正、肩こり、外反母趾などの緩和といったものがその具体的な内容であるが、これらはわれわれにとってはじめて体験するものばかりであり、その即効的な効果を驚きとともに実感することができた。

また、長谷川氏は、大学体育で教えるべき教養とは何か、という根本的な問題についても、ボディワークなどの動向や自身の実践などをふまえた自論を述べられた。この点も、非常に刺激的で有意義な実践交流会となった。

(坂上康博)

2. 教育活動日誌

2010/04/01 教育部会①(新年度顔合わせ会打ち合わせ) *新年度顔合わせ会

04/27 教育部会②(スポーツ方法I・IIの受付・履修状況、健康上理由ある学生の面接状況、スポーツ方法Iの長期欠席者調査依頼、休日の授業開講について、施設問題(大学戦略推進経費)更衣室の宗教的理由による隔離策について)

06/01 副学長との情報連絡会(『体育館の増改築およびスポーツ施設エリアの整備についての要望書』の検討状況と今後の見通しについて)(盛副学長、筒井センター長、伊藤施設課長代理、加藤教務課長、小椋教務課学務総務主査、坂井学生支援課課外支援主査)

06/15 実践交流会(新種目開発・ソフトラクロス:鈴木直文)

- 10/12 教育部会③（来年度カリキュラム、実践交流会について、成績評価（スポーツ方法Ⅰの上書き再履修）について、副学長への申入書（体育館増改築及びスポーツ施設エリアの整備についてのWG立ち上げ要求）
- 10/19 実践交流会（新種目開発・古武術：長谷川智氏）
- 11/02 教育部会④（来年度カリキュラム）
- 12/08 空手道場新築に関する面談（盛元副学長、落合現副学長）
- 12/14 運動施設利用調整会議（落合副学長、陸名学生支援課長出席）
副学長との情報連絡会（①『体育館の増改築およびスポーツ施設エリアの整備についての要望書』の検討状況と今後の見通しについて、②東キャンパススポーツ施設エリアWG（仮称）の設置要望について）（落合副学長、筒井センター長、伊藤施設課長代理、陸名学生支援課長、加藤教務課長、山崎学生支援課課外支援）
- 12/21 教育部会⑤（教育活動目次及び分担、「スポーツ方法アンケート」・教員へのアンケートについて、『ルールブック』『ガイドブック』改訂、施設整備関連、新年度顔合わせ会）
- 12/27 東西キャンパスの運動施設視察（落合副学長、陸名学生支援課長）
- 2011/03/04 教育活動の総括と方針会議

3. 調査活動

今年度もスポーツ方法の受講者に対して、運動文化科として独自のアンケートを実施した。質問項目はここ数年同様のものとなっている（巻末資料参照）。

この結果は、運動文化科全体として当該年度の教育活動に関する総括討論を行う上での素材となり、また、授業を担当する個々の教員が自らの授業を振り返る上での素材ともなる。以下で、アンケートの対象・実施期間・有効回答数・回答者の特徴を素描する（巻末資料参照）。

1. スポーツ方法Ⅰに関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法Ⅰの受講生（登録者数：1061名）
- ・実施期間：2011年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：881名（回答率：83.0%）

回答者の特徴を学年別で見ると、1年生が97.8%（861名）、2年生が2.2%（19名）であった。男女別で見ると、男子が71.7%（632名）、女子が28.3%（249名）であった。種目別で見ると、受講生が最も多いのはテニスの22.2%（196名）で、次いでバドミンントンの19.9%（175名）、サッカーの15.9%（140名）、バレーボールの11.4%（100名）となっている。開講時限では、最も多いのは1限の43.8%（386名）で、次いで2限の28.8%（254名）、3限の27.4%（241名）となっている。総じていえば、回答者の特徴は例年と変わらない。

2. スポーツ方法Ⅱに関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法Ⅱの受講生（登録者数：夏173名、冬248名、計421名）

- ・実施期間：夏学期＝2010年7月、冬学期＝2011年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：180名（夏95名、冬85名；回答率：42.8%）

登録者数が昨年度の366名から421名へと増加した一方で、回答率が66.6%から42.8%へと減少している。ただし、次に示すように、回答者の特徴は例年とそれほど変わらない。回答者の特徴を学年別で見ると、1年生が0.6%（1名）、2年生が16.1%（29名）、3年生が20.0%（36名）、4年生が61.1%（110名）、大学院生が2.2%（4名）であった。男女別で見ると、男子が80.0%（144名）、女子が20.0%（36名）であった。

（中澤篤史）

4. 教育部の活動・体制

本年度の体制は、坂上（部長）、鈴木、中澤、関根（庶務）であった。なお、室長（岡本）も教育部会に出席した。教育部の活動については、活動日誌参照。

Ⅲ. 2011年度教育活動の方針

1. 2010年度の達成と課題

【2010年度の基本方針】

- （1）引き続き、早川後任人事につとめる。
- （2）カリキュラム改革、講義科目の再編成（改廃や体系化含む）について引き続き検討する。
- （3）スポーツ方法Ⅰの開講形態の多様化について可能性を検討する。
- （4）引き続き、長期欠席者・見学者の実態把握につとめ、関係部署と連携し対策を検討する。
- （5）体育館の増改築およびスポーツエリアの整備等について、学生担当副学長および財務担当副学長との連絡を密にし、概算要求の実現のために年度当初から働きかける。関係各部署からも情報収集に努める。また、概算要求によらない予算措置の可能性についても模索する。
- （6）GPA制度の本格導入に際し、学生の履修行動の変化について情報を収集する。

上記のような2010年度の基本方針にそって、それぞれの達成状況と課題について総括していきたい。

（1）早川後任人事

昨年に引き続き、運動文化学科会議の議題にあげて年間を通して追及した結果、1名の候補者を見出すことができたが、採用には至らなかった。

（2）カリキュラム改革、講義科目の再編成

2010年度からカリキュラムの見直しに向けた議論を開始した。まず、われわれが現在担当している授業の全貌をつかみ、全体をにらんだ改革を実施していくために、全学共通教育（スポーツ方法については別途検討）、学部、大学院のすべての担当を以下のように一覧化した。

1) 全学共通教育講義科目（スポーツ科学・健康科学/教育社会学）・ゼミ

	科目名（担当者）	2009	2010	2011
常 勤	①現代スポーツ論（坂）	○	○	—
	②現代社会とスポーツ（岡本）	—	○	—
	③健康と福祉（藤田→中澤）	—	—	—
	④スポーツ文化（高津→坂上）	○	○	◎非常勤
	⑤地域社会とスポーツ（尾崎）	○	—	—
	同（鈴木）	—	—	○
	⑥教育と社会（中澤）	—	中澤	
⑦教養ゼミ	上野 中澤 岡本	鈴木 中澤 尾崎	鈴木 中澤 坂 岡本	
非 常 勤	①スポーツと映像文化（鬼丸）	○	○	○
	②ヒューマンセクソロジー（村瀬）	○	○	○
	③運動と体力の科学（渡辺）	○	○	○
	④スポーツトレーニング論（未定）	—	—	—
廃 止	①国際スポーツ運動（上野）	—	—	廃止
	②スポーツと権利（内海）	—	—	廃止

2) 学部

①社会学部

	科目名（担当者）	開講年度・担当者		
		2009	2010	2011
導入科目	社会研究の世界（尾崎、坂上、坂、鈴木） *2011年度は坂が全体のコーディネーター	坂	坂上	坂* 鈴木
基礎科目	スポーツ社会学の基礎（尾崎、坂上、坂、鈴木）	坂	坂	坂 坂上 鈴木
発展科目	①身体社会史（尾崎、坂上、坂、鈴木） *大学院科目も兼ねる	尾崎	尾崎	坂上
	②スポーツ問題の社会学（尾崎、坂上、坂、鈴木）	—	坂上	—
	③スポーツと社会過程（尾崎、坂上、坂、鈴木）	坂上	—	—
	④身体と教育（中澤）	中澤	—	中澤
	⑤教育課程編成論（中澤他）	—	中澤	—
		尾崎	尾崎	尾崎

ゼミ	坂上	坂上	坂上
	坂 中澤	坂 中澤 鈴木	坂 中澤 鈴木

②商学部

	科目名・担当者	開講年度・担当者		
		2009	2010	2011
発展科目	スポーツビジネス論（岡本）	岡本	—	岡本
寄付講義	ツーリズム産業論（岡本）	岡本	岡本	—

3) 大学院

①社会学研究科

科目名・担当者		開講年度・担当者		
		2009	2010	2011
専攻科目	①国際スポーツ論（尾崎、坂上、坂、鈴木）	坂上	鈴木	鈴木
	②地域スポーツ論（尾崎、坂上、坂、鈴木）	—	尾崎	—
	③身体社会史（尾崎、坂上、坂、鈴木）	尾崎	尾崎	坂上
	④身体教育論（中澤）	中澤	中澤	中澤
	⑤リサーリワークショップ（全員）講座主任 大講座主任	尾崎 尾崎	坂上 (木村)	鈴木 (吉田)
ゼミ		尾崎 坂上 坂 中澤 上野	尾崎 坂上 坂 中澤	尾崎 坂上 坂 中澤 鈴木
共通科目 高度職業人養成科目 ①教育技法の実践 ②発信英語力		尾崎 坂	尾崎 坂→鈴木	— 鈴木

②商学研究科

科目名	開講年度・担当者		
	2009	2010	2011
スポーツマネジメント	—	岡本	—
ゼミ	岡本	岡本	岡本

このように全体を把握しながら、全学共通教育、学部、大学院それぞれの講義科目について検討したが、それらを通して共通理解がなされたと思われる論点や決定・実施された事項は、以下のようなものである。

<全学共通教育講義科目>

本学におけるスポーツ関係の講義科目は、まず共通教育からスタートしたという歴史的な経緯および1人1科目という担当体制によって担われてきたこと等から、スタッフが大きく入れ替わった現在、学部専門科目との整合性等も改めてふまえた全体的な見直しが求められている。

こうした理解に立って、2010年度に決定ないし実施したことは、①担当者の退職にともない「国際スポーツ運動」「スポーツと権利」を廃止し、②中澤が担当する科目を「現代生活と健康」から「健康と福祉」へと名称変更し、③新たに赴任した鈴木を独自に立てず、尾崎との2人体制で「地域社会とスポーツ」を担当することにしたことである。

今後の課題としては、①内容的な違いがわかりにくい「現代社会とスポーツ」と「現代スポーツ論」の名称の再考、②それも含めて講義科目を教養科目にふさわしい名称と内容のものに改編すること、③複数担当制等への移行があげられる。

<学部・大学院講義科目>

社会学部／社会学研究科の専門講義科目についても、見直しが求められている。その理由は、第1に、共通教育の講義科目の見直しが学部科目とも連動すること、それとも関連して、第2に、新たなスタッフの特性および近年のスポーツ社会学の動向をふまえたカリキュラムの再考が必要であること、第3に、授業負担の軽減をはかる必要性である。最後の点は、スタッフ全員が共通教育科目を一人当たり通年で3.5コマ担当しているという量的な面とともに、「スポーツ社会学の基礎」「身体社会史」「スポーツ問題の社会学」「スポーツと社会過程」の4つの学部科目、および「国際スポーツ論」「地域スポーツ論」の2つの大学院科目、以上計6つの科目の担当者を固定せず、4人による交代制で運営していることによるところも大きい。

こうした点をふまえて、2010年度に決定ないし実施したことは、①「スポーツ社会学の基礎」を2010年度より複数担当制とすること（3名か4名かは未定）、②さしあたり他の科目の担当者をできるだけ固定化する方向で、それぞれの名称・内容・担当者・開講頻度等の検討を、GPA制度もふまえつつ進めていくことである。

すでに大学院商学研究科では、2009年度より「スポーツイベント論」「メディアスポーツ論」を廃止し、「スポーツマネジメント」に一本化しているが、社会学研究科の科目を検討する際に、こうした経緯等も視野に入れる必要があり、また、学生サイドからの検討も不可欠である。

(3) スポーツ方法Ⅰの開講形態の多様化

この点については、教育部より下記のようなたたき台を出して可能性を探り、具体化に向けて検討を進めた。2011年度に実施するものについては、後述の通りである。施設とくに屋内施設の不足による制約はきわめて大きいですが、そうしたなかでも引き続き可能性を最大限追究していくべきである。

「スポーツ方法」に関する改善策(案)

— 4/13,27 教育部での議論の紹介と提案 —

2010.5.11

教育部

●下線部があるものが来年度実施予定、あるいは検討中のもの

1. スポ法Ⅰについての改善案

(1)月曜の開講コマを減らす

① 青沼担当を月曜1(サッカー)・2(テニス)・3(Ⅱテニス)から、水曜の1(テニス)・2(テニス)に変更。 青沼氏には4月12日に打診し、内諾を得ている。その場合、残りの1コマ分を他の非常勤の方に担当していただく(月3菊地ソフト等)か、青沼氏に水曜3限で担当してもらう等の検討が必要。

② 月2のジャズダンスをバドミントンに変更?

*なお、抽選の際の月2コマのコンピューター処理に問題はないかの確認も必要では。

(2)木1の開講種目の増加→具体的には?

これまで社研のRWのため、5名の教員が開講不可であったが、同授業が時間割上、水曜の午後となったため。

(3)新たな時限での開講

① 月・火・木・金の4限目：ジョギングやバレーボールなど運動部活動との競合がない種目は開講が可能。

② 水の3限目：同上(ただし非常勤のみ担当可。他の科目ではすでに実施されている)。

(4)室内種目の定員を増やす：バドミントン32→40? バスケット36→40?

*人数的にはきついが、バドは人気第1位種目なので、この程度の条件の悪化は受け入れていいのでは?

(5)男子種目の共性化

サッカー、ソフトに女子を参加させる手立てを講じられないか? 「女子の部」を設置するとか、女子サッカーというコマをつくるとか、女子にはハンディが付与されるとか。

(6)同時開講科目の新設

たとえば、木1のフィットネスを2コマ開設(あるいは定員2倍の1コマ)し、相互に連携をとりながら進める。

(7)新たな種目の開設

場所と用具、人数に規定されるが、「サッカー&フライングディスク」「ゴルフ&フライングディスク」といった複数種目や「屋外レク」「ニュースポーツ」など。

→「ニュースポーツ」については中澤が検討開始。

B. スポ法Ⅱについて

スポ法Ⅰの問題を解決したうえで、配置や種目の見直しが必要では。

たとえば、同一コマで複数の種目を開講し、人数の少なさを連携でカバーする（しかし、Ⅱはその種目へのニーズが大なので困難かも）。

初心者も気楽に入れるよう敷居を低くする工夫など。

*スポ法Ⅱは、「人数が少なくて開講されない可能性があるものについては専任教員が担当すること」を原則としてきた。

（４）長期欠席者・見学者の実態把握と対応

近年、スポーツ方法Ⅰの授業においても、長期欠席者や長期見学者が目立つ傾向にあり、また、とくに１・２年生で問題を抱えた学生に対して、精神的な面も含めたケアの必要性が学内で高まっている。こうした状況をふまえて、2008年度には「各ケースについて早期に事情を把握し、運動文化科として対応していく体制をつくる必要がある」と総括し、それをふまえて2009年度は、5月時点で担当教員に長期欠席者の有無について照会し、そこであがって来た学生について、可能な限り関連部署からの情報を集めた（ただし、個人情報保護の問題もあり、それ以上の具体的な働きかけはできなかった）。

こうした運動文化科の取り組みが、2010年度には、とくにGPA制度の下で問題がある学生の早期発見と対応のために活用されることとなった。すなわち、5月と11月の2度にわたって、「スポーツ方法Ⅰ」の担当教員に照会し、長期欠席者をリストアップし、全学のGPA制度の検討ワーキングに提出した。

このようにGPA制度を実施していくうえでの重要なシステムづくりという点での貢献はあったものの、これまでめざしてきた「運動文化科として対応していく体制」については進展がなく、学生相談室や留学生課、保健センターなどとの連携などについて、ひきつづき検討していかなければならない。

（５）体育館の増改築およびスポーツエリアの整備等

この点についての2010年度の取り組みは、Ⅰ-3の「教育条件の整備・拡充」で述べたとおりであり、年度末、新たに施設マネジメント委員会の下に立ち上げられた「課外活動施設等検討ワーキンググループ」を通して、体育館の増改築を含めたスポーツエリアの整備・充実について、より具体的なプランを作っていくことが次の課題となる。そのために情報収集や調査活動を独自に開始する必要があるだろう。

（６）GPA制度の本格導入に際し、学生の履修行動の変化について情報収集

2010年度から本格導入がなされたGPA制度が学生の履修行動にどのような変化を与えるのか、という問題については、全学共通教育専門委員会・学部教育専門委員会を中心に全学レベルで情報の収集と検討がなされ、GPA制度についての学生の理解が不十分であるといった実態が明らかになってきているが、変化の把握と検討が引き続き必要である。

GPA制度の本格導入にともなって、運動文化科として検討した点は、上書き再履修に関するものであり、「スポーツ方法Ⅰ」については、語学とも足並みを合わせて、F評価の者だけに上書き再履修を認めることにした。

2. 2011 年度の基本方針

- (1)引き続き、早川後任人事の実現に向けて取り組む。
- (2)全学共通教育、学部、大学院それぞれの講義科目の再編成に向けて引き続き検討し、具体化を進める。
- (3)スポーツ方法の開講形態、内容、方法、評価、アンケート調査等について引き続き検討し、改革をはかる。
- (4)「課外活動施設等検討ワーキンググループ」を通して、体育館の増改築を含めたスポーツエリアの整備・充実について、より具体的なプラン（概算要求によらない予算措置の可能性等も含む）を作っていくこと、およびそれに向けた情報収集や調査活動を開始する。
- (5)熱中症対策や休日の授業における事故対策をふくめて、安全安心な教育環境の整備に向けて、関係部署との協議等を進めていく。
- (6)引き続き、長期欠席者・見学者の実態把握につとめ、関係部署と連携し、対策を検討する。
- (7)GPA 制度の本格導入にともなう学生の履修行動の変化等についての実態把握につとめる。

3. 2011 年度のカリキュラム編成と体制

<開講コマ：全学共通教育>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講コマ数は、通年コマに換算して 45 コマ。

	2011 年度		2010 年度	
全学共通教育開講コマ	45	通年コマ	45	通年コマ
・方法Ⅰ	30	通年コマ	30	通年コマ
・方法Ⅱ	21	半年コマ	21	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	6	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

<体制>

- ・専任は、引き続き早川後任の採用がなく、尾崎がサバティカルのため、6 人から 5 人の体制となる。
- ・尾崎のサバティカル分は、非常勤講師を充てる。
- ・専任担当総コマ数は 17.5 コマとなる。(3.5 コマ/5 人)
- ・専任サバティカル分を非常勤コマで充当したため、非常勤担当コマ総数は昨年度より 3.5 増しの 27.5 コマとなった。運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は 61.1%である (2010 年度 53.5%)。

<種目別 2011 年度開講コマ数>

	スポーツ方法Ⅰ＝通年		スポーツ方法Ⅱ＝半年	
	2011 年度	2010 年度	2011 年度	2010 年度
テニス	8	6	6	6
バスケットボール	2	2	2	2

バドミントン	5	6	2	2
サッカー	3	5	2	2
バレーボール	3	3	—	-
ソフトボール	2	3	—	-
ジャズダンス	2	2	—	-
フライングディスク	2	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	—	-
オルタナティブスポーツ	1	—	—	-
体操	—	-	—	1
ゴルフ	—	-	2	2
古武術	—	-	1	1
ジョギング	—	-	1	1
ウォーキング	—	-	1	-
野球	—	-	—	1
ソフトラクロス	—	-	2	1
療育コース	1	1	—	-
	30	30	21	21

<2011年度の特徴>

- ・ スポーツ方法Ⅰでは、テニスが6から8に、フライングディスクが2から3に増、バドミントンが6から5に、サッカーが5から3に、ソフトボールが3から2に減、オルタナティブスポーツを1新設した。
- ・ スポーツ方法Ⅱでは、ソフトラクロスが1から2に増、器械体操と野球が1から0に減、ウォーキングを1新設した。
- ・ 種目定員を、スポーツ方法Ⅰのバスケットボールで36から40名に、フライングディスクで44から48名に変更した。
- ・ 非常勤講師担当種目は、担当コマ増によりスポーツ方法Ⅰの種目の追加（菊地：フライングディスク）、運動施設調整等により変更（森：バレーボールからテニスに、新村：バドミントンからバレーボールに）を依頼した。新規非常勤講師の長谷川氏にスポーツ方法Ⅱ（古武術）を、中村氏にスポーツ方法Ⅰ（テニス）、スポーツ方法Ⅱ（テニス）、スポーツ科学・健康科学（スポーツ文化）を依頼した。
- ・ 昨年度同様、スポーツ科学・健康科学は6コマ、教養ゼミは3コマとなる。
- ・ 2008・2009年度同様、月曜日が非常勤講師のみの授業日となる。

4. 教育条件の整備・拡充

当初、年度開けを目処にWG設立にむけた働きかけを行うことを想定していたが、落合副学長の迅速な対応により年度内に立ち上げが決定し、課外活動施設等検討WGには岡本室長が運動文化科を代表して参加する予定。運動文化科としては、西キャンパスを含めた総合的な整備を考慮した上で、同WGに対して提案を行っていくことが求められる。

5. 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整

例年通り、次年度カリキュラム編成期に、副学長主催で関係クラブ・サークルとの調整を行う。学生支援課と連携を密にし、課外活動団体と良好な関係を保ちながら情報を収集し、施設改善のためにもいっそうの充実を図る。学生担当副学長の出席は毎回要請する。

6. カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究

例年の調査活動、「学習のためのアンケート」を検討し、資料とする。
実践交流会を開催し、て教育方法改善のために活用する

7. 教育部の活動

(1) 行事の開催

- ①教育部会の定期的開催
- ②新年度顔合わせ会
- ③実践交流会の開催

(予定) 6月： 10月：

- ④施設整備関係部署との交流
- ⑤教育活動の年度末総括

(2) 調査活動

「スポーツ方法Ⅰ」の満足度と「スポーツ方法Ⅱ」の受講希望調査（冬学期末）
「スポーツ方法Ⅱ」の満足度調査（夏・冬学期末）

(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

「われわれの教育活動」の刊行
施設整備・改善のための基礎資料の作成

(4) 2011 度 教育部関係日程（案）

4月	1日（金）	新年度顔合わせ会
月	日（ ）	実践交流会 1
月	日（ ）	実践交流会 2
月	日（ ）	教育活動の総括・方針検討会議
月	日（ ）	年度末懇親会

われわれの教育活動

2010 年度総括と 2011 年度方針

No.32

2011 年 4 月 1 日発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室 042-580-8270

運動文化教員室 042-580-8131

〒186-8601 国立市中 2-1